

1-3139

324-111

V



清
新
禪
話

明治
42 3 8
内交

清新禪話

人道の大本 (第一席)

目

次

一、愚かなる羅猴の喩……………	一
二、焦門の高弟石山寺に會す……………	二
三、我は丈艸に與みせん……………	三
四、釋迦佛の平等主義……………	四
五、大乘佛教の平等觀……………	六
六、大乘佛教の圓融平等觀……………	七
七、簡單なる圓融の事實……………	九
八、梵網經の平等一體觀……………	一〇
九、孝佛と萬有一體觀……………	三
十、忠義と萬象一體觀……………	一四
十一、一切の徳行と萬有一體觀……………	二六

目次

十二、王學の萬有一體觀……………一七

十三、芭蕉一茶の風流……………二〇

十四、孝子三郎兵衛の譚……………二二

十五、汎心論より見たる一體論……………二三

十六、仁愛より見たる一體論……………二五

十七、永田佐吉仁孝の譚……………二六

十八、王陽明が科學的見地……………二八

十九、人間と禽獸との類同點……………三二

二十、社會と個人の相關……………三三

二十一、人道の大本は己れを推すに在り……………三四

二十二、平等と混同の別……………三五

二十三、王陽明の譬喩……………三六

人間の本性 (第二席)

一、人間の真相果して如何……………四〇

目次

二、人生の表裏反復……………四一

三、那先比丘の譚……………四三

四、人性論は四種に大別すべし……………四五

五、性善説の當否に就て……………四六

六、性惡説の當否に就て……………四八

七、善惡混在説の當否に就て……………四九

八、西山公の逸話……………五一

九、善惡混在説の缺點……………五三

十、善惡共無説の當否に就て……………五五

十一、善の種々なる階級……………五七

十二、善人と惡人とは五十歩百歩のみ……………五九

十三、人生は絶對善なり……………六一

十四、王陽明の至善説……………六三

十五、王氏の生死解脱……………六四

十六、禪の自性清淨心……………六五

十七、西山公仁徳の暉……………九

徳行の基礎 (第三席)

目	次
一、王陽明の道心人心と禪の真心妄心……………	三五
二、命と理と性との合一……………	三五
三、天意を體認するを要す……………	三五
四、仁愛は天意に出づ……………	三七
五、諸徳を一貫せる準則を要す……………	三八
六、報恩主義の不徹底……………	三八
七、交換主義の病弊……………	三八
八、忠孝二道は至誠を以て一貫す……………	三八
九、仁義も亦至誠に外ならず……………	三八
十、至誠は自己の寶藏なり……………	三九
十一、坐禪と戒律の一致……………	三九
十二、道元禪師の一法究盡……………	三九

目	次
十三、他力念佛の一法究盡……………	九四
十四、神道も念佛も其旨一なり……………	九七
十五、至誠と生死透脱……………	九七
十六、孝子慈母の至誠……………	一〇〇
十七、一貫の妙理……………	一〇一

進徳の工夫 (第四席)

目	次
一、儒者と禪僧の問答……………	一〇五
二、治心の工夫に二あり……………	一〇七
三、知行の一致と向内的工夫……………	一〇九
四、二宮尊徳翁學者と僧侶を嫌ふ……………	一一〇
五、向外的工夫と言行一致……………	一一三
六、白隠門下の狂僧……………	一一四
七、加藤清正の知行一致……………	一一五
八、知行は男女の如し……………	一一八

九、何を知り何を行ふか……………二九

十、賭博師が良心の非難……………三三

十一、誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり……………三六

十二、遠くは諸を物にとり近くは諸を身にとる……………三七

十三、道徳は教ふべからず……………三七

十四、二宮尊徳翁と仁藤仁齋先生……………三九

清新禪話

忽滑谷快天述

大本(第一席)



一、愚かなる彌猴の喩。巧みなる獵師がありまして膠鞣を澤山に造つて山中に入り、之を溝の上に置きますると、愚かなる彌猴が之を見て甘い物であらうと思ひ、兩手で取らうとするに兩手共に粘り着いて離れませぬ。そこで兩足をかけて踏み離さうとすれば兩足も亦共に粘着して離れませぬ。彌猴は怒つて口で噛み離さうとしますれば口も亦粘着して全身動く事ができませぬ。是に於て獵師は杖を以て彌猴の手脚の間に貫きまして肩に擔ふて家に歸つたと申す事であります。これは大涅槃經と云ふ經文の中の喩で、吾々御互は此愚かなる彌猴が甘まさうに見える膠鞣の爲に心を奪はれたる結果、兩手、兩脚、口の五つを粘縛せられて遂に大切なる命を失ふ如く、目前の事物に誘惑せらるゝ結果、眼耳鼻舌身の五

欲に粘縛せられて遂に大切なる人道の生命を失ふに至るのであります。
二、焦門の高弟石山寺に會す。花の如き少女の容姿は何人も見ん事を欣ひ、絲竹の妙なる調は何人も聞かん事を欲し、錦を衣、玉を食ふの樂は何人も極めん事を望まぬ者はありませぬ。聖賢の士と雖も斯かる聲色の慾を好まぬ者はないのであります。唯此慾の爲に本心を失ふと失はざるに由りて賢不肖の差違を生じまするので、一方は向上して神佛の域に近づき、他方は墮落して禽獸と伍を同うするに至るのである。支考が

牛になる合點ぢや朝寐夕涼

と吟じたるが如きは自ら禽獸たるを甘んじて放逸の行をするので、洵に淺ましき凡愚の境涯であります。これに就て憶ひ出しました。昔し、丈艸、去來、支考、野水、越人、石山寺に會しける。頃は彌生も末つかたなれば京には花は盛りも過ぎたれど此山は櫻まだ盛りにて霞の立ずまひも定めなく、鳥虫も心して暮れゆく春を惜みけり。時に去來曰く、俳諧はよしなきものかな、徒らに風景の奴となりて、心のほだし止む時なし、されば是も知らず夫も知らず手を拱きて閑居する人には

劣りぬべきわざならんと。丈艸曰く、法すら捨つべし況や非法をやと金剛經に説きおかれて捨よとは教なり、森羅萬象皆幻、此に至て何をか捨ん、捨んとするに又一物、捨んとするに一物なしと捨たるは金剛の體なり、我は捨たる浮身ならねば念佛もよし、俳諧もよし、酒來る船も觀念なれば、さいなみの春の景色ほだしともなれ、痼疾ともなれ、我は山水を樂むものなり、野水、越人は如何思へると。兩人唯うなづきぬ。支考曰く風雅は名聲の器なり、我は浮世を相手とし俳諧の名に狂せんと。

三、我は丈艸に與みせん。却説以上の物語に就て篤と考へて觀するに吾々御互は何たる卑しい境涯で御坐りませう、去來の如きは俳諧の道を樂みて、月に嘯き花にあこがる、さへ心の絆なりと云うて嘯きましたのに、吾々は裸體畫に嘯き、淫猥小説にあこがれ、藝者の尻を追ひ、競馬の賭に狂奔して慚ることを知らぬありさまではありませぬか。支考が風雅は名聲の器なり、我は浮世を相手として俳諧の名に狂せんと云ひましたのは無遠慮に彼の俗腸を曝露して興のさめる申分でありませぬが、今の

世には俳諧を聲利の器とする者のみ多くして風流の名に狂する程の人さへも稀である。何と慨かほしい事では御坐りませぬか。丈艸は道が一段と境涯が高い、森羅萬象皆まほろしなれば取るべきもなく捨つべきも無い、捨つべき無きに捨んとするは更に一物を執るので、捨んとするに一物なしと捨て果て洒々落々の境涯となり、其後に森羅萬象を觀來れば、さいなみよする春の海も、漕ぎ來る船も、咲く花も、吹く風も、照る月も一として妙なる法の御姿ならざるは無い。

かずならぬ庭の小草の白露を

求めてやどる秋の夜の月

と古歌にある如く、真如の月はかずならぬ庭の小草にも白露の白き心さへあれば宿るものであります。吾々凡夫の哀しさには我見私欲の塵埃に汚されて心の鏡が萬象をありのまゝに映すことができません、之が爲に見るもの、聞くもの皆病となつて自然界の善美なる法性の姿を見ることができぬのであります。

四、釋迦佛の平等主義。所謂我見私欲とは無殺の欲と申しまして、我身

一つを「吾」と心得て天地萬物の平等一體なるを知らぬ所から、萬事について身最負、身勝手をするのであります。此我見私欲は一切の邪惡なる行爲の本で、所有不徳義は之を母として生れ來るのでありますから御互に一日も速く我見私欲の迷執を破らねばならぬ。如何にして我見私欲の迷執を破るかといへば萬有一體の理を心得るより外に致方はありません。是を以て之より萬物一體の理を少しく御話する事に致しませう。

禪學の根本は萬有一體の理に外ならぬのでありますから此理を心得るとは參禪に志ある人々に大切であるのみならず、此理は能く我見私欲の迷執を破つて實踐道德の基礎となるもの故に人道の大本として極めて肝要のことで御坐ります。

釋迦佛が初めて佛教を御説になりましたより其教化に沾ひました人々が佛の御徳を慕ふて弟子となりました時、釋迦佛は大慈悲心を以て貴賤上下の差別なく皆平等に御取扱なされたので有ます。當時印度には四姓と申して我日本の華族士族平民新平民に似たやうな階級があつて貴賤の區別が極めて嚴格で有ましたのを、釋迦佛は人類を平等一體と見、同胞兄

弟と御覽なされて佛門に歸入した者は華族でも新平民でも平等に取扱はれ、血統に依らずして修行の長短、道德の淺深に依て上下の別を立てられたので、之が佛教に萬物一體の觀念の實現された最初の實例で有ます。

五、大乘佛教の平等觀。釋迦佛は大慈悲の餘り人間を平等一體と御覽なされるのみでなく、廣く一切の情ある者には皆憐みを垂れ給ひて不殺生戒を御説きなされ、一切の動物を無益に殺してはならぬと戒められました。

そこで釋迦佛以前より印度に行はれて居りました所の靈魂轉生説、即ち現世で悪い事をした者は來世に犬猫などの畜生に生れ、前世で善い事をした者は現世に人間や天部に生れるといふやうに、靈魂が善惡行爲の報いで或は地獄、或は餓鬼、或は畜生、或は人間に生れると唱へる説に合しましたから、人間も時としては禽獸となり、禽獸も時としては人間となると考へられ、遂に一切の生物が平等一體であるとの思想が起つたに相違ない。

且つ佛教が次第に進歩發達して教理も高尚になり大乘佛教が勃興するやうになつて、佛性の普汎、即ち一切衆生に悉く佛性があるとの議論

も起つたので、一切の生物が平等一體であるとの考へを益々助長しました。之に加ふるに眞如緣起論とか如來藏緣起論とか申しまして宇宙の萬象が眞如なる一元より生起するとの思想も起りましたから、一切の生物のみでなく一切の有生無生の物が平等一體であるとの觀念さへ懷かるに至つたのであります。

六、大乘佛教の圓融平等觀。大乘佛教の平等論は愈々其歩を進めて華嚴の圓融論と爲つて遂に其絶頂に達したのであります。圓融論と申すのは種々なる六づかしの理窟もありますが、解り易く申せば百川の水が大海に入りて平等一體となる如く、多くの氷塊が皆融解して一味平等の水となる如く、宇宙の萬象が渾然として一體と爲る事で、天地間の有生無生の群類が相即し相入して彼此差別なきに至るのであります。されば山は水と融合し、水は火と同化し、火は金と合一し、金は土と和合し、動物は植物と合一し、植物は金石と融合し、天は地と同化し、地は萬物と合一して重々無盡であるといふので、従つて佛も衆生も、凡愚も聖賢も、因位も果徳も差別なく平等一體であると申すのであります。

以上は餘りに減茶苦茶の論のやうに見えますが決して左様でありませぬ、何となれば近來研究されて居ります所の地質學や、古生物學の調査に依れば人間は極めて新しく地球上に發生したもので、其以前には人間以外の動物や植物のみで人間は全く無かつたのであります。されど人間の祖先たる母體が無くて人間が偶然と發生する理由は無いから、人間は他の同類の生物と祖先を同する者と推想せざるを得ぬ。之と同様なる事實によりて一切の哺乳類は他類の動物と祖先を同する事が推想せられ、一切の有脊動物は他の無脊動物と祖先を同することが推想せらるゝ。更に溯つて地球の歴史を追踪すれば動物が其祖先たる母體がなくて偶然と發生する理由はないから動物も植物も同一祖先より生じたる者と推想せられ、更に進んで地球の歴史を追踪すれば生物は其跡を拂つて滅し全く無生物のみの時代となる、されど生物が母體なくして偶然と生ずる理由はないから、無生物が生物と成り得るもの、即ち無生物は簡單なる生物であるかと考へざるを得ぬ。此に至りては生物と無生物は渾然として一體となるのであります。

七、簡單なる圓融の事實 吾々御互の如き無學なる者に最も解り易く圓融の理を示すものは西洋の進化論であります。進化論が示す所の極めて簡單なる事實を一つ擧げて見ますと、哺乳類の前肢の圓融する事でありませぬ。犬猫の如く單に地上を走る獸類の前肢は棒の如き形狀でありませぬ。鰐鼠の如く地中を掘りつゝ歩む動物の前肢は恰も鋤の如く長く短かく出來て居る、また蝙蝠の如く空中を飛ぶ動物の前肢は翼の如き形を爲し、鯨の如く海中を泳ぐ動物の前肢は鰭と爲つて居ります。併し此等の哺乳類の前肢を解剖して其構造を調べますれば根本的に其仕組の一致するを見るので、即ち肩と臂との間に上膊骨といふ骨が一本あり、臂と手首との間には前膊の骨が二本並んであり、手首の處には腕骨といふ豆の様な骨が八つ計あり、手の甲の中には掌骨が五本並び其先に各々指の骨が附いて居る。此の如き哺乳類の前肢の根本的な構造は人間も猿猴も犬猫も蝙蝠も鯨も全く一致して少しも相違がないのであります。たゞ人間や猿猴にあつては拇指と他の四本の指とが稍と相離れて對合して動く故に物を握ることができませぬが、犬猫にありては指の所を地につけて

歩みますから、掌に當る處は五本の骨が一束となつて棒の如く見えます、之に反して蹊鼠の前肢は短く太く出来て上膊骨や前膊は肩の中に埋もれたやうになつてあります。また蝙蝠の前肢は上膊骨も前膊骨も非常に長く指の骨は細い竹竿の如く延びまして其間に薄い膜があるから翼かと思ふやうに見えるのであります。次に鯨の前肢は魚の鰭の如く見えますが内部の構造は人間や犬猫と同様の配置になつて居る、唯種々なる骨が太く短く孰れも同様の形をなして關節も殆んど屈伸せぬやうになつて居る。果して然れば哺乳類の前肢は皆根本的に同一であるが其生活の状態に依て或は手となり、或は脚となり、或は翼と爲り、或は鰭と爲るので、萬象の圓融無差別なる妙理を事實の上に示して居るのであります。

八、梵網經の平等一體觀。梵網經と申す御經に下のやうな文があります。一切の女人は皆我母なり、一切の男子は皆我父なり……一切の地水は皆我先身なり、一切の火風は皆我本體なり。

一切の女人は皆我母なり一切の男子は皆我父なりといふのは一切の生物の平等一體なるを申しましたので、一切の地水は皆我先身なり一切の火

風は皆我本體なりといふのは一切の無生物も有生なる吾々御互と平等一體なるを申したものであります。上述の如く佛教には萬象一體の思想が古くよりありましたから、これが禪宗教理の根柢となりまして

萬法歸一 萬法一如

などと唱へられ、大切なることと爲つて居ります。

却説此萬象一體の觀念が如何にして人道の大本となるかといふに、最も手近い所から御話し致し申すと、俗諺に

我身を抓つて人の痛さを知れ

と申すことがある、即ち我身を抓れば痛いから人も抓られては定めて痛からう、吾が病氣の時に苦しかつたから人も病氣では定めて苦しからう、吾が貧乏の時に大いに困つたから人も貧乏なら定めて困るであらうと考ふる時は人の病氣を吾病氣の如く感じ、人の貧乏を吾貧乏の如く感じます故に痛く之に同情を表して相愛し相救ふの道を行ふことができます。換言すれば吾と人と一體と爲りまして人の哀しむ時は我も之を哀み、人

の愛ふる時は吾も之を愛へ、人の喜ぶ時は吾も之を喜ぶ、これ即ち人道であります。而して其本は如何といふに人のことを人の事とは思はぬ、吾身のことの如く感じてまゐります所、即ち人も吾と一體と爲る所が本となるのであります。

九、孝悌と萬有一體觀。母子の親愛について見まするに子供が病氣であれば母は吾身の病氣と同様に苦痛を感じ、子供が人に打たれますれば母は己が打たれたと同様に怒を發し、子供が喜び笑ひますれば母も亦喜び笑ふといふ有様で、母と子供と一體となつて居るから、母は子供の事を見て人の事とは思はぬ、是に於てか母子の恩愛が成り立つのであります。また孝子が親に事へるのも其通りで、孝子と親とは一體と爲つて居りますから、吾身が寒ければ親も定めて寒からうと思つて之を恤はり、己れが暑ければ親も定めて暑からうと思つて其手宛を致します。且つ親の身に病があれば我身に病があるやうに感じて看病をし、親の體が健康になれば我身が健康になつたやうに愉快を感じます。されば恰も母親が其子供の大小便を見て一向不潔に思はぬやうに孝子は親の身に不潔があら

うとも厭はずして世話することができまゝする。されば母子の恩愛は母子の一體となるより起り、孝行の美德は親子の一體と爲るより起るのであります。

大和國の孝子喜助は常に吾心は父の心、吾體は母の身、吾は此心と體との二つ、即ち父と母とを御預り致して親子三人で世を渡るのであると心得てゐたと申します。故に腹立しい事がありましても吾心なる父上に腹を立てさせましてもは相濟まぬと思つて腹を立てず、甘い物や、甘い酒がありましても餘り多く飲食して我體なる母上に害があつてはならぬと考へて暴飲暴食は致しませぬ。朋友が悪い處へ遊びに行かうと誘ふても兩親を伴つて悪い處へ遊びには行かれませぬ、斯様に喜助は平常親子三人一體となつて居りましたから世に名高き孝子となつたのであります。かくして孝子は父母と吾と一體と思ふ所から父母の歿して後も我身を父母の遺體として大切に致しまする、誠拙和尚が

たらちねの永き別れのたひげには

いや慎まんわかみ一つを

と詠じ、孝行にて名高き元政上人が

惜からぬ身を惜まる、足乳根の

おやの殘せるかたみと思へば

とよみ、宗良親王が

我ながら我ぞなつかしなき人の

わけて殘せるかたみと思へば

と歌はれましたのも此意で御坐りませう。

十、忠義と萬象一體觀。之に反して不孝ものは親と吾とは全く別體と心得て親のことには少しも痛癢を感ぜぬので、親が喜ばうが嘆かうが、病まうが苦しもうが、不孝者は少しも感ぜませぬ。是れ不孝者の不孝者たる所以で御坐りませう。されば父親が放埒なる俸つかひに向て「貴様は其様に放蕩をして悪い病にでも罹つたら如何する。ちと慎め」と申しませうと、「否、父さん、心配しなされるな、如何な病に罹らうとも、己れの體で煩らうのだ、父さんの體を借はしないから、餘計な心配をおしでない」と口答をする。斯様に親子が別々になりまして一體となりませぬと、家内

の不和合を醸します。此家内の不和合が本となつて親子相争ひ、兄弟相殘ひ、不倫不祥の大害を生ずるので、人生に家内不和合ほど大なる不幸はありませぬ。

忠義とても孝行の通りで、忠臣は其君主のことを他人のこと、は思ひませぬ。「君辱しめらるれば臣死す」との古言の如く、君が侮辱を受けませれば臣は己れ躬ら其侮辱を受けたよりも強く感じて君の爲に命を捨てても其屈辱を雪ぐのであります。されば大石良雄等が淺野内匠頭しんじゆうの爲に復讐をして忠臣の鎗やりとなりましたのも、別に異つた考へがある譯ではない、たい御主君の侮辱を受けられたのを己等が侮辱を受けたやうに感じ、御主君の御無念を己等の無念と同様に感じ、君臣一體でありますから、如何にもして此御無念を晴し参らせたいといふ一心より千辛萬苦を経て復讐を遂げたのであります。

不忠不義は此反對で君は君、臣は臣、君が殺されやうが國が滅びやうが我命を全うせねばならぬ、我財産を失うてはならぬと私欲ばかりを逞うする、これ亂臣賊子の常であります。近頃新聞に喧しく傳へられました

賈風奴などは此適例で御坐ります、即ち我財産を殖し我榮華を極めんとする私欲より國家の利益を犠牲にするので、國家と吾と一體なる考ひが毛頭無いのであります。

十一、一切の徳行と萬有一體觀。昔に忠孝の二つのみではない、一切の道徳的行爲は此平等一體の觀念より起るのであります。例せば愛國者の如きは國家の憂を以て己れの憂と爲し、國家の福利を以て己れの福利と爲し、國家と吾と一體となつて居る、是に於て乎愛國者たることができるのであります。昔し仁徳天皇が人民の富を以て皇室の富とし給ひ、

高きやにのぼりて見れば烟たつ

たみのかまども賑ひにけり

てふ大御心を以て民の富めるは朕が富めるなりと仰せられたのは君民一體の御思召でこれより難有ことは御坐りませぬ。故に今日に至るまで仁徳天皇と申し上げて其御恵みの深さを感謝するのであります。

また佛陀の如きは一切衆生を吾子の如く思召して吾々凡夫の爲めに苦を抜き樂を興ふるの道を示し給ひ、衆生と苦樂を同らし給ふは佛陀と一切

衆生と一體となるので、佛陀の大慈悲者たり、一切衆生の父たる所以は、こゝにあるので御坐ります。果して然れば下は親子夫婦の恩愛より、上は仁君賢相の徳行、乃至神佛の慈悲、哀愍に至る迄一として此萬物一體の觀念に由らざるはない。加之、衆生と佛、凡夫と聖人等の間に隙ゆべからざる鴻溝があつて平等一體でないとするれば衆生は永久に衆生にして佛と成る事はできず、凡夫は永久に凡夫にして聖賢となることはできぬ、従つて教育も修行も全く無用となりませう、何となれば凡愚は凡愚、聖賢は聖賢、各々別々であつて平等一體でないとするれば如何に教育しても、如何に修行しても凡愚が聖賢となる氣づかひは無いからであります。

十二、王學の萬有一體觀。萬有一體の理は禪學の根柢となるのみでなく陽明學にても之を以て學問の基礎としてゐるのであります。抑も萬有一體の大觀念を明瞭に説き出したのは支那では莊子などが始めて、

天地我と並ひ生じ、萬物我と一たり

とか
汎く萬物を愛して天地一體たり

とか申して居ります。これが本となつて儒道の二教を兼ねたる華山の隱士陳希夷なども明かに此觀念を説き明し、宋學の祖たる周濂溪も之に效ひ、周濂溪に私淑したる程明道に至りて

仁者は天地萬物を以て一體と爲す

といひ

仁者は渾然として物と體を同うす

など、盛んに説き出したのであります。王陽明は程明道の意を承けて

大人は天地萬物を以て一體となす者なり、其天下を見るや猶ほ一家の

如く、中國猶ほ一人の如し

と申して居ります。陽明の意を按ずるに大人君子の仁心ある者は天地萬物を以て吾と一體と爲してゐる、そこで天下を見ることは吾一家の如く、吾中國の人を見ることは猶ほ一人のやうであると申すので、仁者は同胞國民を見ること吾一身の如くでありますから其國民の水火に陷溺するを見ては己れが水火を踐むやうに覺えて之を救はずには居らぬ、又其國民の繁榮するを見ては己れ自ら繁榮するやうに覺えて愉快を禁ずることが

出來ぬ、されば天下を見る事己れが一家の如くで、天下の風俗が腐敗すれば吾妻子が自墮落になつた様に覺えて之を矯正せんとし、天下が亂れば己れの家内に騒動がある様に覺えて、之を諫止せんとする、且つや天地萬物を吾と一體として居るから、禽獸の斃るゝを見ても、草木の凋るゝを見ても、山岳の崩るゝを見ても齊しく吾身の凋衰するやうに覺えて、哀感の情に耐へぬので御坐ります。これが眞に大人君子たる行ひで、人間道徳の極點であります。宋儒も申しました如く、賢者は手足の無感覺になつて意の如くならぬことを手足の不仁といひます、吾手足でも無感覺になつて意の如くならなければ吾と一體ではない、別體のものと同じであります。世の無慈悲なる人は他人のことに無感覺で、他人のことに毫も利害痛癢を感じさせぬ、そこで不仁者の名を得る譯で、畢竟するに無慈悲の人は「吾」とする所が一個の軀殼に止まりまして、他人と一體たることができぬので御坐ります。されば不仁者の「吾」は其包容する所が極めて狭小であるから小人と稱せらるゝのも無理ならぬ次第であります。

十三、芭蕉一茶の風流。昔し芭蕉翁は其門弟杉風が上氣の爲めに耳が遠くありました故、大層之を氣の毒に思はれ、一生の間千變萬化を盡して吟じ出したる俳句の中に一も雙に關したることはよみませぬ、又門人にも堅く誠めて雙のことはよませぬやうに注意したと申すことであります。兎角眼が見えぬとか、耳が聞えぬことか、啞とか、跛とか、不具なる人は常に其不具なる處を氣にかけてゐるもの故、決して不具者の前で不具のことをいふものでは御坐りませぬ、芭蕉翁が杉風の爲に心を用ゐました如きは師弟一體の親愛で千古の美談と申して宜しう御坐りませう。俳人一茶は

やれ打つな蠅か手をすり足をす

と口占み、又

やせ蛙負るな一茶こゝにあり

と申して小動物にまで同情を寄せました。世に不仁無慈悲なる程無風流の事は御坐りませぬ、虎狼の如き猛獸も風雅にとりなし、蚤虱の如き不潔の動物も奇麗によみ、天の萬物を毀ひませぬ思召を體認しやして始め

て風流と稱せられるのであります。

十四、孝子三郎兵衛の譚。昔し江戸の湯島四丁目に紙屑買三郎兵衛といへる貧家の男子九歳になりけるが人買の手に捕ひられ、奥州に下りしに、ゆく／＼道に落ちたる紙屑あれば必ず拾ひて懐ろに入おく、毎日かくの如し。人買の男怪みて尋ねしに、父親は紙屑買なれば拾ひ置きで參らせなばさぞ喜び給はんとおもひて拾ふなりと答ふ。又此子日毎の食に向ふたびにも旅宿に寐るにも必ず父母を拜し、常に言へるは今頃父母は如何にしておはすやらんと、吾身のこととは嘆かずして、たゞ父母をおもひて或は涙を落し、或は戀ひ慕ひて其さや人を感動す、さすが悪人たる人買も、數日其子の孝心を見きくにつけて大いに感悔し、己れ親の生涯に不孝なりし罪を思ひ知り、深く慚ぢなげきて、以爲らく是までわづかに世を渡らんとて、あさましき業を爲しぬる故、かゝる孝子をさへ勾引し、親に幾何の愛苦をかけし事、虎狼にも劣りたる人となりぬるこそ、あさましけれ。やがて此子を還しやり、假令餓て死すとも、此業は必ずやめんと決定し、すでに奥州の道、數日をへた

れ共、彼子を伴れ引かへして江戸に來り、其子に親元を尋ねて、其家に送り至る時、はや黄昏になりぬ。をりしも雙親は、我子の事いひ出で、共に哀しむ時なるに、表の方より、此子かへすべし受取給へと内に押入れ、人買は走り去る。父母おもひがけなく、大いに驚き、且つ喜び其子も喜び言はん方なく、共にうれし涙のうちより、三郎兵衛心づき、今の人といめて禮謝のべんと走り出で尋るに、行方しれず、殊さら日も暮れぬれば詮方なく、空しく歸りて、我子に事のやう、くはしく聞て、人買の心改まりしも我子の孝心深き故なりとて、夫婦の感喜かきりなし。此子年長するに従ひ、いよく孝行あつく、幼きよりの事ども官にきこえ、御褒美の銀下し賜はりしとなり。後數年にして、かの人買は僧と爲り來りて、三郎兵衛及び其子をたづねしに、三郎兵衛はさきの年病で死し、かの孝子三郎兵衛と名のり、段々家榮え、今は紙をあきなふ、よき商人となりてあるに、めづりあひたり。人買は孝子に耻ぢて業を止め、心を改め出家して、なき兩親の冥福を修し、不孝の罪を謝し、今は小庵の主となり、心安く世を渡ると語りて、先

きの人買には似もつかぬ善人となりぬ。互に昔しを語り合ひ、二三日宿せしめ、懇ろにもてなして別れしとなん。

右の物語について篇と考へて御覽なされ、孝子三郎兵衛は父母の心を以て心として人買に捕はれて行く道すがらも紙屑を拾ふて父を喜ばせんと致しました。人買の鬼の如き眼にも此子の可愛らしい孝行の有様を見ましては思はず知らず、涙が出でまして人事とは思はれず、吾身と孝子と一體となつて善心が自然に起つたのであります。されば三郎兵衛が孝行は謂ふ迄もなく、人買の心を改め出家して心安く世を渡ることのできたのも所謂吾と人と一體なるのが本となつたのであります。かくして萬有一體と申すことは所謂徳行の基礎で御坐ります。

十五、汎心論より見たる一體論。王陽明が萬有一體を説きまするのには三つの要點があります。第一は汎心論よりするので、陽明は之を感應上より説くと申して居ります。开は吾々御互に心があるならば他人にも心はあると推想せねばならぬ、即ち日本人に心があるならば外國人にも心はあると推想せねばならぬ、文明人に心があるならば野蠻人にも心はあ

ると推想せねばならぬ、野蠻人に心があるならば禽獣にも心があると推想せねばならぬ、禽獣に心があるならば草木にも心があると推想せねばならぬ、草木に心があるならば金石土芥にも心があると推想せねばならぬ。何となれば今日學者の説に由れば人間と禽獣との間には判然たる區別はなく、禽獣と草木との間にも明確なる區劃がなく、草木と金石との間にも確乎たる差別はないからであります。

されば人と人とが意氣相感するのでなく、人と禽獣とも相互に感應する、例せば牛馬と其飼主の相愛する如く、犬猫や小鳥でさへ己れを愛育する人に親む如くであります。かゝれば吾々御互は平生親愛する動物と相感應するのみでは御坐りませぬ、草木の凋落するを見ましても何となく悲哀の感に打たれ、一枚の瓦が破れたのを見ても不快の感を起すのであります。且つ春風の面を拂つて温かなる彌生の頃には何となく其氣候と感應して春の心を起し、金風の袂をかすむる秋の日にも亦其氣節に感應して物淋しく思ふでありませう。これ萬物には皆各々それ相當の心がありますから其心が吾々の心と感應致すので、結局萬物と吾々と全く別々で

ないことが知れます。

また人間は天地間の萬象と共に盛衰榮枯致して居りますので、天地の氣候が和順にして百穀草木が繁茂すれば人間も盛んに生活するが、其反對に氣候が不順にして百穀草木が枯死すれば人間も枯死する外はない、死ぬる生きるも人間は萬象と共にするので御坐りませぬ。故に心ある者は小蟲畜類に至るまで相愛し相憐れむのが人の道である、一草一木の微に至るまで、徒らに毀傷せざるのが人間の徳行と申すものであります。

十六、仁愛より見たる一體論。王陽明が萬物一體論の第二の觀察は仁愛の上よりするので、此事は前に既に屢々申した如く、仁愛の心ある者は他人他物に對して思ひやりが深くありますから、天地間の有生無生一切のものに同情を表して、天下を見ること猶ほ一家の如くでありませぬ。而して其本は唯己れを推すの一つあるのみで、己れが甘い物がたべたければ人も甘い物はほしからう、己れが善い着物がきたければ人も善い着物がきたからう、己れが金錢がほしければ人も金錢はほしからう、己れが厭やな事は人も厭やであらう、己れの嫌ひな事は人も嫌ひであらう。さ

れば人の厭やな事や嫌な事は人に仕向けてはならぬ、己れの好むやうに人に仕向られる時は非常に幸福であるから、人にも其やうに仕向やうと心掛る。これが己れを推すので、萬物一體の仁の根據であります。如何なる人間でも甘い物や善い着物の嫌ひなものはない、如何なる悪人でも我身の可愛くない者はない、我身が大切なれば之を推して人の身も大切にす、我子が可愛ければ之を推して人の子も可愛がる、これ所謂仁者であります。さるを我子は可愛がつても之を推して人の子に及ぼすことを知らぬ、我身一つを大事にして之を推して人に及ぼすことを知らぬ、これ所謂不仁者であります。故に仁と不仁の別る、所、人間と人非人と、の別る、所、善と惡、道德と背徳との別る、所は己れを推すの一點にある、此一點に深く讀者の注意せられんことを希望致します。

十七、永田佐吉仁孝の諱。これについて思ひ出しました。昔諱がおります、

永田佐吉は美濃の國、羽栗郡、竹鼻の人なり、人と爲り忠孝仁慈にして尤も佛を信ず、故に人號して佛佐吉といふ。幼にして尾張の國名古屋、

屋の紙商に仕へ、少暇あれば書を読み字を寫す。同輩之を其主に諷す、主怒て之を逐ふ。佐吉舊恩を忘れずして主家窮困の時、屢々財物を贈り以て之を佐く。佐吉素より貧なり家に歸りて綿を販るに常に權衡を用ゐず、其賣るや人の取るに任せ、其買ふや人の與ふるに任す、人亦其直なるを知りて多く取らず。少く與へず。其母餅を嚙かんと欲す、佐吉乃ち餅を呑き母に謂て曰く餅子を作る大いにする勿れ。母其故を問ふ。佐吉曰く同坊に餅子店あり、若し我家の餅子大ならば則ち人必ず多く吾家の餅子を買はん、恐くは彼の妨害を爲さん。母其言を然りとし餅子を作ることを稍々小にす。然れども人其精良なるを知りて之を買ふ者日に衆く、遂に富を致す。

嘗て諸州の神祠佛院を巡拜し出羽に抵りて疾作り幾んど死せんとす、乃ち佛を念じて曰く願くは國に歸りて一たび老母を見て死せん。既にして疾癒えて國に歸り母に語る、母の曰く此れ佛の冥護なり、汝佛體を鑄て以て之を謝せよ。佐吉乃ち江戸の鑄工に命じて佛像一體を鑄る、既に成りて船に載せ致して遠州洋に抵る、颯に遇ふて船幾んど覆らん

とす、船人多く載せたる物を海に投ず、佛像亦中に在り。既にして船
 達し、船人故を告て罪を謝す。佐吉曰く庸詎ぞ傷まん、此れ反て幸な
 り、遼州洋は古より險惡と稱せられる、佛像此に在て衆生を濟度せば
 則ち固より吾願ふ所なり、我奚ぞ費を惜まんや。又船人に託し前の鑄
 工に命じて一像を鑄、既に成りて至る、之を竹鼻に安ず。又石工に命
 じて石佛を造る其數終に七百に至る。嘗て邑中の圮橋屢々霖潦の填る
 所と爲りて行人涉るに病むを患ひ、財を捐て石橋を造る者二。國侯其
 孝にして善行多きを聞き、召し見て米若干苞を賜ひ之を賞す、又其欲
 する所を問ふて之を授けんとす、佐吉乃ち歌一首を獻して之を辭す、
 曰く

ありがたやかゝる浮世に生れ來て

なに不足なき御世に住む哉

十八、王陽明が科學的見地。王陽明が萬有一體論の第三の觀察點は科學
 的でありませす、尤も支那には西洋科學のやうな、完全な科學は御坐りま
 せぬが、陽明の達見なる能く西洋科學の説く所と同様なる點に著眼した

のでありませす。陽明は

風雨露雷日月星辰、禽獸草木山川土石、人と原唯一體なり、故に五穀
 禽獸の類は皆以て人を養ふべく藥石の類は皆以て病を療ずべし、唯此
 一氣を同うするが故に相通するのみ。

と申しませして、先づ五穀禽獸の人を養ふ所以に著眼し、次に藥石の病を
 療ずる所以に注目して、科學的に天地間の萬物が人と一體たる道理に悟
 入したのでありませす。吾々人間は禽獸や草木とは大いに異つて一種特別
 の靈妙なる生物の如く考へてゐませす、實際は左様でない、其證據に
 は吾々は毎日三度五穀を食ひ、野菜を食し、時には魚鳥の肉を食しませし
 て身體の缺損を補ふて参りませす。されば吾々御互の身體は五穀野菜禽
 獸の肉にて成立したる一團塊に外ならぬ、若し禽獸が吾々と全然別のも
 ので吾々と性質の異つたものならば彼等の肉が變じて吾々の血肉となる
 筈は御坐りませぬ。五穀野菜も其如くで彼等が全く性質の違つたものな
 ら、吾々の體内に攝取される理由がない、然るに五穀野菜も、魚鳥牛羊
 の肉も吾々の身體を組立つる所を見ませすれば吾々人間と同性のもので、

吾々の身體と一體であるに相違ない。以上は動植物、即ち有機體が吾々と一體たるをいふたのであります。

次に藥石水漿の類も亦吾々人間の病を療じ、身體の缺損を補ふ力がある、されば藥石の如き無機體と謂はれ、無生物と目されてゐる物も吾々の身體を組立つて一體となるのであることを知らねばならぬ。土や水の如きは吾々の常に賤しむ所で何の感覺もない、何の精神もないと思ふて居るものであります。此等のもので吾々の身體も精神も出来てゐる、何となれば何人も三度の食事をして此身體を形成せぬ者はない、即ち五穀や鳥獸を食はぬ人は一人もない、而して其五穀や鳥獸は彼等の身體を何ぞ造るかといへば、五穀は水土を食物として其自身を形成し、禽獸は同類や草木などを食して其形骸を造るのであるから、同じく水土より生じたものを食ふて其身體を形成するに外ならぬ、例せば虎や獅子は他の羊や鹿を食ひて其身體を構成し、羊や鹿は草木を食ひて其身體を形成し、草木は水土を食ひて其自身を形成する。又鷹や鷲は雀や鳩を捕ひ之を食して其身體を形成し、雀や鳩は五穀を食ふて其身體を形成し、五穀は水土

を食ふて其自身を形成するといふ順序で、結局、吾々五穀野菜を食しても、禽獸の肉を食しても同じく水土を以て此身を形成することゝなりませす。これが王陽明の科學的なる觀察點であります。

十九、人間と禽獸の類同點。人間が元來他の動物と異らぬことは其發生のありさまを見ても知れる譯で、吾々御互が母の胎内に始めて宿りませた時は一個の細胞に過ぎませぬ、故に此時は人間は單細胞動物と同一であるので、それより次第に複細胞となれば又複細胞動物と同一となる。更に進んで魚と同様なる鰓孔などの生ずる時は人間も魚と同じくなる、又獸類と同じく尾が生じ、全身に細毛が生じたりする時は人間も獸類と同じくなる譯である。さればにや最後に人間となつて生れ出た後にも耳を動かす筋肉もあり、尾を動かすべき筋肉も尾椎骨の處にあり、皮膚を振ひ動かすべき筋肉もあり、盲腸には動物に必要なにして人間には無用なる蟲様垂など不用の器官もありませす。

又人間界の事は大抵動物界に見出すことができませす、即ち人間に法律があれば猿や象の群にも一種の法規があつて奸淫などの悪行を罰する、

人間に政治があり君臣の関係があれば蜂の社会にも君臣があり分業がある、人間に戦争があれば蛙や雀にも戦争がある、人間に奴隸使役があれば蟻にも奴婢を使ふものがある、人間に漁獵があれば蜘蛛も網を張りて小蟲を漁撈する、人間が家を造れば鳥も巢を作る、人間に夫婦があればトグツオにも一夫一婦の制がある、人間に農業があれば亞米利加の蟻にも穀物を採收するのがある、人間が酒を造つて飲めば猿猴も酒を造る、人間に言語があれば禽獸にも一種の言語や、思想交換の法がある。何れの點より見ても人間と禽獸と大なる相違はないと謂はねばならぬのでありませす。

二十、**社会と個人の相関**。吾々御互が一日も忘れてはならぬ事は人間は本来社会的の動物で孤立する事のできぬは事實である。譬へば吾々の身體が手と足と分離したり、胃と腸と分離したり、脳と胸腹と孤立したりすることのできぬ如く、社会が一個の大なる生物となつて互に分離孤立するを許さぬのでありませす。詳言すれば政府は腦の如く、地方官は神經の如く、**白血球の全身を周遊して、ウイルスを捕まれば警官が悪漢を捕**

縛する如く、手足の害を防ぐは軍人が社会の干城たる如く、學者君子の社会を指導するは耳目の全身を指導する如く、農夫が社会に食物を供給するは消化器が食物を汲收する如く、社会改良家は肺臓が血液を清新ならしむる如く、悪人暴漢は腫物の如く、醜業婦は社界の腐敗物の捨處てんごなれば肛門の如く、遊民と稱する可もなく不可もなき人々は臍の如くでありませう。されば胸と腹と相依り、頭首と手足と相應じて統一的に活動せねばならぬ。如何なる事がありませしても一部分の爲めに全體を犠牲にすることは許さぬ、即ち手を保護する爲に全身を殺すとか、肺を善くする爲に生命を縮めるといふやうなことは断じて禁止せねばならぬ、之と同様に農夫を助けるが爲に社会が害を蒙るとか、商人の都合の宜い爲に社会が苦しむといふやうなことは決してしてはならぬ、況や一個人の都合の宜い爲に人の物を横奪したり、他人を傷けたりして社会の害を爲すことは許されぬ筈で御坐りませす。否、全身を助ける爲めには手一本位は失ふても宜しい、生命を全うする爲めには脚の一本位はどうでも宜しいとして全體の爲には一部分は犠牲にして宜しいのでありませす。是

を以て古へより愛國者とか仁人とかいふ人は己が身を殺して仁を爲すと申しまして一身を犠牲として社會全般の利害に貢獻するのであります。二十一、人道の大本は己れを推すに在り。以上申し述べました所の萬有一體の理は如何なる愚人にも無學者にも實行のできるものであると思ひます、何となれば這は己れを推すのみのことで、吾身を擽つて人の痛さを知るだけのことであるから極めて簡單なる道理で何人にも明瞭であらねばならぬ。而してまた一方に於ては此理は極めて廣大でありまして大學者も大思想家も其證明に苦しむほど幽玄なる思想を含んで居る。故に大學者にも無學者にも、聖賢にも凡愚にも齊しく道德の根柢として人道の大本として満足なることで御坐ります。さるを西洋學に心酔したる人々は倫理學といふ六づかしい學問を人に教へましてそれで道德を行はせるつもりで居る。これは洵に迂遠にして、且つ支離の弊を免れませぬ、何となれば克己説であるとか、快樂説であるとか、功利説であるとか、完全説であるとか、何とか彼とか、種々倫理説を列べましても道德の實行には極めて迂遠であります。故に此等の

學説を聞く人々は誰の説は何、誰の説は何と備忘録へ記入して置くのみで、少しも道德家にはなりません。今日我國の學校の先生等が生徒に教へる倫理は大抵此様なことでありますから實地に無効なのが多い筈であります。倫理の實行には學説も何もいりませぬ、單力直入、己れを推せばそれで充分である、己れを推すとは己れの欲する所は人に施し、己れの欲せざる所は人に施さぬのみのことで、天地同根萬物一體の理を實行するのであります。二十二、平等と混同の別。萬有の平等一體なるを論ずる時は宗教も道德も自然に社會的となり、人類同等主義となつて、所謂社會主義や、無政府主義の如き者になりはせぬかといふ疑ひがあります。併し決して右様の虞れはない、何となれば平等を説くのと混同を説くのは同日の論でない、平等とは差別を捨てずして公平無私なる事、混同とは差別を没却したる平等であります。譬へば造化の妙手に成れる山川草木等に就て見まするに山と川とは非常に差別がある、日と月とは大いに相違してゐ

る、草と木とは種々なる點に於て違ふ、然れども造化の眼より見れば平等で天地の一現象として各々存在する、造化が山を高くして海を深くしたからとて山の最負をして海を粗末にしたのでなし、日輪を大きくして月輪を小さくしたからとて日輪を特に愛して月輪を憎んだ譯ではない、山は高く海は深いので平等に山水の景色を形成し、日輪は大に月輪は小なるので平等に晝夜明暗の原因となるのであります。故に日輪が貴くして月輪が賤しいの、山が貴くして海が賤しいのといふ理由は毛頭ない、皆平等にして貴賤上下の差別は無けれども山は高く海は深く日輪は暖かく月輪は涼しいのであります。これ差別を捨てざる平等で吾々の體認する所の主義であります。

之に反して混同は萬有は平等一體であるから山も海も同様にせねばならぬ、日輪も月輪も同様に扱はねばならぬ、従つて草も木も同様に處置せねばならぬ、鳥も獸も同様に處分せねばならぬ、野蠻人も文明人も同等であらねばならぬ、外國人も内國人も同等であらねばならぬ、貧民も富豪も同じ様に利益に與らねばならぬ、天子も非人乞食も同じ様に待遇せ

ねばならぬ、男も女も同じことをせねばならぬといふ考で、即ち差別を没却して平等ならしめんとする、是に於て乎君臣上下の別を無視し、何もかも無茶苦茶にしてしまふのであります。無政府主義などいふことも恐くは此混同の思想から起つたのであります。

之を一身に譬へて見まするに手は執り、足は歩み、眼は見、耳は聞き、肺は呼吸し、胃は食物を消化し、皆それ／＼の分業があつて差別して居ります。差別してあるからとて手が貴くして足は賤しく、目は貴くして

耳は賤しいといふ理由はない、皆平等に身の一部として存在してゐる。従つて頭を貴んで腹を賤しめ、腹を貴んで背を賤しめるは不合理であります。さりとて腹は腹、背は背、分業があつてそれで平等なので、背をして腹と同じ仕事を爲さしめ、腹をして頭と同じ仕事を爲さしむるのではない。さるを混同論者は差別を捨て平等ならしめんとするから、君主も乞食も一處にし、智者も愚者も同じく取扱ひ、男も女も同じやうにしうとする。されば男子が兵役につけば女子も兵役につかねばならぬ、男子に參政権があれば女子も參政権があらねばならぬ、男子が高等官にな

れば女子も高等官にならねばならぬといふ。併し男女には分業がある、天然自然に體格が違ふから、職業の異なるのが公平な仕方、平等なる處置である。女が飯を炊くから男も飯を炊かねばならぬ、女が尻髪ひしげみを結ふから男も尻髪を結はねばならぬ、女が子を生むから男も子を生まねばならぬといふは混同で御坐ります。

故に君は君たり、臣は臣たり、父は父たり、子は子たり、妻は妻たり、夫は夫たる處に平等主義が行はれるので、君臣の別を無視し、夫婦の關係を度外にしたのが平等ではないのであります。惡平等の人等ひとらのいふやうに政府もいらず、君主も無用、貧富の別も不都合、官民の相違も不可といふならば、農商の別も不都合、長幼の差も不可、夫婦の別も無用、親子の相違もいらぬと謂はねばならぬ。これでは全く混亂無秩序であります。譬へば一身の内で肺臟と心臓との別も無用、目と口の別も不都合、頭と肛門との別も不可といふやうなもので、混同論者の謂ふ所は目が色を見るから耳も色を見ねばならぬ、耳が音を聞くから鼻も音を聞かねばならぬ、頭が物を考へるから肛門も物を考へねばならぬ、肛門が大便を

するから頭も大便をせねばならぬといふ論法であります。

二十三、王陽明の譬喩。王陽明は平等の中に差別があり差別の中に平等がある事を譬へて申しますに、一個の竹園の如きもので、園中の竹は高いのもあり、低いのもあり、細いのもあり、太いのもあり、新しいのもあり、古いのもあり、葉にも大きいのもあり、小さいのもあり、枝にも長いのもあり、短いのもあり、節ふしにも伸びたのもあり、縮ちぢまつたのもあり、竹の種類にも孟宗もあり、眞竹まいたけもあり、籐竹ふしもある。併し何れの竹も平等に出来てゐて、竹ならぬものはない、孟宗は竹で眞竹は竹でないの、大きいのは竹で小さいのは竹でないのといふことはない、孟宗もあり籐竹もあり、長いのも短いのもあるが何れも平等に竹にして一園の風景をなしてゐる。若し惡平等の人の考ふる如く孟宗も眞竹も同一のものとし、節の長いのも短いのも同じ丈に一定し、太いのも細いのも一様に改め、葉の大小廣狭まで一定してしまふたら竹は死物となつて少しも風致の賞すべきはない。造化は之に反して種々様々に差別して無限の變化の中に平等を捨ない、これが造化の妙手である。吾々御互も千變萬化なる字

宙現象の中にありて平等一體の理を捨てず、平等一體の理に住して差別の秩序を忘れず、人道の大本を失はね所が造化の妙を實現するのであります。

人間の本性(第二席)

一、人間の真相果して如何。却説前席に於ては人道の大本と申す事を御話し致して置きました、人道を守るべき人間の本性は果して如何様のものか、此問題を解きませんでは人間が此大本を守る事ができるかできぬか確定しない譯で御坐ります。依て今回は人間の本性に就て卑見を陳べて見ませう。古人は人間を以て一種特別の靈妙なる生物と誤想して居つた者が多くあります、今日では動物の研究も人類の研究も次第に進歩したる結果、人間も一種特別なる生物ではなく、靈長類と申す猿の中の一類である事が明白となりました。是を以て人と禽獸とは判然區域を異にする譯にはまゐりませぬ。思ふに人間は神と禽獸との中間に位置して或は上りて神佛の境涯に入り或は下りて禽獸と伍を同うするのであり

ます。先づ人間全般の上から観ますと御釋迦様や、孔夫子や、ソクラテスや、基督のやうな人等は其性行が何れも潔白で、神佛の境涯に近いのであります、同じ人間の中にも野蠻人の甚しいのは猿猴にも劣る者がゐるといふが事實である。これは人間全般の上から観たのであります、更に一個人に就て観察しましても其通りで、或時は非常に清淨にして高尚な考を起す事もあり、或時は豚のやうな慾や、狼のやうな考を起す事もある。一日の中にも佛壇に向て念佛を申す時もあり、客と共に坐談をする時もあり、子供を叱る時もあり、勝手元に注意する時もあり、兩便所へ入つて氣張る時もある。即ち或は上り或は下り一上一下止む時なく、神佛と禽獸との中間を彷徨するのが人間の常で御坐ります。

二、人生の表裏反覆。されば人間には向上的の欲望もあり、向下的の欲望もある、即ち一方には進んで義を守り、徳を樹て神佛の域に入らんとする欲望もあり、他方には私利私欲を逞うして禽獸に等しき目的を逞せんとする欲望もある。前者は社會的にして後者は個人的であります。右様の次第であるから人間の世界は内外表裏があつて非常に複雑なるもの

であります。例せば代議士選挙の競争などを見ますると候補者先生は自動車に打乗り、端書大の名刺を配布して政見の發表演説などをしてゐる所は何れの點から観ても人物の競争、政見の競争と見えます。併しこれは表面だけで、裏面には賄賂の競争もあり、御世辭の競争もあり、候補者が米搗虫のやうに叩頭する競争もあつて、人間の競争とは見えぬ場合もある。政治家に至りましても其通りで表面には政治をとるが裏面には賄賂もとる、兩方とる人が澤山にある。學者と謂へば表面上真理の研究に盡瘁するのであるが、裏面には曲學阿世で學問を金儲けの器にする人は比々皆然りであります。されば表面は落語家にして裏面は辯問となり、新聞記者を表面にして裏面に洋服ゴロツキとなり、紙屑買を表面にして裏面には持逃をなし、藝者を表面にして裏面には淫賣をするなどは深く咎むるに足らぬ程であります。

蛇食ふと聞けば恐ろし雉子の聲

で、表面には美しい粧ひをしてゐても裏面には蛇を食ふのが世人の常態であるから、風俗改良會を設けて晝の中は公衆を集めて大演説をなし、

夜に入れば辯士自身が淺酌低唱で風俗壞亂をするもあり、坐禪觀法の眼を閉ぢて活きた達磨のやうな表面を裝ふて裏面には三年以前の借金の利子を算用するものもある。斯く表裏内外のあるが人生の真相で御坐りまして何人も之を否むことはできません。

三、那先比丘の譚。これに就て想ひ起しました、

昔し印度に那先比丘と申す有名な高僧が御坐りました。此那先は印度僧の習慣に従ひ、又自己の識見によりまして「沙門不拜王者」と申して、出家は國王たりとも拜をしないといふて堅く執て動かぬ人でありました。然るに希臘の人で彌蘭王といふがあつて、那先比丘を召して佛法の話しを聞かうと思ひましたが、那先が國王に拜をせぬといふを聞きましたから、特に計を設けて王の御座所の入口を小さく低く作りまして、此入口を通るには如何しても頭を下げねばならぬやうに致して、那先を召しました。那先は彌蘭王の御座所を見ると入口が小さく低くて頭を下げねばならぬ、依て頭から入らずに尻から入て王に見えたと申すことあります。

彌蘭王は入口を潛るには必ず頭を先きにするものと思ふたと思えますが、那先比丘は尻から先きにする方もあるのを心得てゐた。然れば入口を潛るにさへ表裏の二つがあります。又或人は金を貯るにも表裏の二法があると申した。金を貯るには一の秘訣があるとの事で、是非教へて貰ひたいと思つて、其人を訪ねますと、教へてあげるから二階へ上れと申します。二階へ登ると天井から一本の鐵棒が繩で釣りさげてあつて器械體操のやうにしてある。其鐵棒に飛びついてぶら下るのぢやと申しますから左様致すと、足の下に羽目のやうな者がありますして、それを開けると刀が五六本逆さまに樹てあります。これは危険ぢや、落ちると田樂さしにあつて死んでしまふ。如何したとか尋ねますと金を貯めるのは危険なものぢやから辛棒しろ、そこで棒を握つた兩手の小指を離せと申しますから小指を離すと、今度は薬指を兩方とも離せと申します、愈々危険でありますが薬指を離しました。今度は中指を離せと申しますから、笑談いふてはいけぬ、中指を離せば命ちが危ういといひますと、少しの辛棒ぢやから是非に離して見ると申します。そこで金を貯る法を知りたさに一生

懸命で中指を離しましたから拇指人と指指で圓い金の棒を握つてゐました。すると金を貯る秘訣はそこぢや、圓い金を握つたなら命ちがけで離さぬやうにしろと申しました。かゝる次第で金を貯るにさへ表裏の二法即ち金を儲けるのと、金を費はぬのと積極的消極的の二つがある。人間萬事此の如くで内外表裏のないことは一つも無い、故に表面のみを見て裏面を看過してもならず、裏面のみを見て表面を看過してもなりませぬ。人生の表裏内外を透見して始めて人生の真相を悟ることができるのであります。四、人性論は四種に大別すべし。古來支那には人性に關して種々の學説がありまするが、畢竟するに、人の性は善であると申す説と、人の性は惡であると申す説と、人の性は善惡を兼ねてゐると申す説と、人の性は善でもない、惡でもないと申す説との四つに歸します。斯様に多くの議論を分類して四つに歸著する法を佛教では四句分別と名けまして屢々應用されてゐる。此法に依ると天下の紛々たる議論を悉く網羅して餘す所はない。且つ人間の思想は何事についても此四句の外に出ないのが

常であります。解り易い事で申せば茲に一個の動物があるとするれば其動物は男であるか、女であるか、男でもあり女でもあるか、男でも女でもないか、此四句の外には考へて見やうがありません。又茲に一個の人間があるとするれば其人間は日本人であるか、日本人でないか、日本人なると同時に外國人であるか、日本人でも外國人でもないか、此外に思慮して見やうが御坐りませぬ。

果して然れば人性に就ても人は善であるか、惡であるか、善惡混在であるか、無善無惡であるか、此外に考へて見やうはない、故に古來支那に於ける總ての人性論は此四句に包容せられて残る所は無いのであります。五、性善説の當否に就て。人性は善であるといふ説は澤山ありますが其代表者たる孟子の論に由りますと、人には生れながらにして是非を辨へる所の良知良能と申すものがある、人は本來善心を具へて居るから何んにも知らぬ赤子が井戸へ這ひ込まんとするを見ては如何なる惡人でも可愛さうぞやと思ふて之を救はぬ者はない、これ人心に本來仁愛の善徳が具はつてゐる證據である、また如何に惡漢でも盜賊でも汝は盜賊ぞや

惡漢ぞやと人に謂はるれば忸怩として慚愧せぬ者は一人もない。これ人心に義理の善徳が具はつてある證據である。されば人の性は善であるといふが孟子の議論で御坐ります。併し熟ら人生の百事を通覽しますると前に申した如く、人には向上的社會的の欲望があつて、社會の福祉を増進する場合もありますが、それと同時に個人的向下的の欲望もありまして、兎角不義無道の行ひをしたがる者である。是を以て人間界には善もあり惡もあり、邪もあり正もあり、混亂紛糾して居るのが現在の事實で御坐ります。

此事實を本として論じますれば孟子の議論は偏見のやうに思はれる。何となれば善も人間のする事、惡も人間のする事でありますから、一方は人間の本性から出て、他方は本性に背くとは申されませぬ、即ち善が人の本性より出た行爲なりとすれば惡も亦其本性より出た行爲とせねばならぬ。善のみを人の本性に契ふとし、惡は之に背くと謂ふが如きは一種の偏見で、人生の半面にのみ心を注いだ獨斷であると言はねばならぬ。斯様な譯で孟子の説は至極結構な議論であります。が人生の實際と相違し

て、學說としては缺點があるので御坐ります。
 六、性惡説の當否に就て。孟子と正反對に立ちましたのは荀子で、人間の本性は邪惡なるものと論じてゐる。荀子の言ふ所に由ると、人は生れながらにして聲色の欲を具へてゐる、何人も美しい色を好み、快い聲を好みます、是に於て乎、放逸淫蕩の風が自然に生じて禮義も文理も滅びてしまふ。又人は生れながらにして名利の欲がある、故に何人も名譽を好む者はなく、利益を喜ばぬ人はない、是に於て乎、爭奪の慘害や、擠陷の惡俗が行はれて仁義忠孝の風は跡を掃つて亡びるのである。これ人心の本來惡なるの致す所であるから人の性は惡と言はねばならぬといふのが荀子の考へであります。
 然し荀子の議論も孟子のそれと同じく人生の半面を見て他面を看過した偏見であります。何となれば人間に聲色名利の欲があつて其爲に淫亂や爭奪が起る事は事實でありますが、それと同時に人間は相愛し相憐むの性情を天然に具へて、慈善も行ひ、仁義も踐み、明かに道德的發達を遂てゐる。荀子の説に従へば仁義道德は人間の本性から出たのでない、

皆偽りであると申しますが、人性に元來道德的の點が毛頭ないとしたなら、道德心が人間に起る筈はない、無より有を生ずる事はできぬとしたならば道德性の無き所に道德的事實の發生する理由はないのである。故に人生に善あり道德ある以上は人性を單に惡とのみ見る事はできぬ。且つや古より仁人君子の行ひを見まするに極めて眞面目で、決して偽りではない。偽りに身を殺して仁を爲す事は不可能で御坐ります。要するに孟子が人間の社會的性情のみを本として性善説を立てたと同様に荀子は人間の個人的性情のみを本として性惡説を立てたので、其偏見たる所以は一つであります。
 七、善惡混在説の當否に就て。人生の實際に最も善く當つてゐる人性論は楊雄や司馬光などの唱へた善惡混在説であります。人の性には善の點があるから善を行ひ、同時に惡の點があるから惡を行ふので、善人も時ありては惡心を生じ、惡人も時ありては善を爲す事がある。これ人性に善惡混在する所以であると申すのであります。此説は一應尤もなる説で、吾々御互は事なき時には左して惡心も御坐りませぬが、何か我意に逆

ふ事でもあると随分他人を侮辱したり、傷けたりしやうとする心が勃然として起る、又時としては古人の佳言善行などを聞きますると忽ちにして善い志が油然而として湧き出す。人を惡むかと思へば人を愛し、人を救ふかと思へば人を陥るやうな事もする。殊に精神鍊磨の修行を缺き、正念相續の工夫に熟せざる人は此弊が甚しい。

昔し上總の國の狂歌師で雅號を酒廼屋呑安と申した、酒ずきの男がありまして、或時用事があつて江戸馬喰町の旅宿に滞在して居りました所、同宿に四日市の商人で齡の若い美男子が逗留してゐましたのを、宿屋の下女が戀慕致しまして、艶書を送らうと思ひましたが、無筆で書く事ができませぬ。呑安は狂歌師で文も上手であるのを下女が知つてゐますから、例の如く酒廼屋が酒に酔ふて笑談を言ふて居る所に参りまして、艶書を認めて下されと頼みますると、呑安は酒の上で面白半分に、さらさらと艶書を書きましたが、狂歌師のことであるから一首の狂歌をつけました。

戀ひ死なばわれ雷となりてだに

つかまん君が臍のあたりを

とこでぐるぐると巻紙を捲き、其儘下女に渡しますから、下女は封筒も序でに書て下されといふに、呑安は封筒はいらぬ、直に開いて見る様此儘でよいと申しました。下女も其氣になりまして封筒に入れずに艶書を携へて商人の室へ参りますと、商人は此時適く國許なる養母の所へ書面を出すつもりで、巻紙に文句を認めましたが、封筒がないで、認めた手紙を机の上に置いて封筒を買ひに外出して留守でありました。下女は机の上の書面を見ましても無筆で讀めぬ所から、定めて商人が己れに與へるつもりで認めた者と自分免許で取極めまして之を懐へ入れ、其代りに件の艶書を机の上に置いて歸りました。商人は封筒を買ふて戻りましたが、手紙の替つた事に心つかずに其儘封筒に納れて養母の許に送りました。養母が之を開いて見ると長々しい艶書で且つ、戀ひ死なばわれ雷となりてだに、つかまん君が臍のあたりをとおある。母親は之を見て火のやうになつて怒り之を父親に告げる、父親も捨て置かれませぬから早速呼びつけて勘當するといふ騒ぎを惹き起

した。呑安は此有様を見聞致して己れの過ちを深く愧ぢまして、それよりは堅く酒を禁じまして至極真面目の善い人となつたと申します。以上の譚の如くで、吾々御互は時として酒でも飲みますと途方もない罪過を犯すことがある。又翻然悔悟すれば仁人義士の行を學ぶ事もできます。故に善惡混在説の起つたのも無理からぬ次第であります。八、西山公の逸話。水戸黄門源光圀公即ち西山公の逸話に下の如き美談があります。

西山公御隠居の後、山莊にて御放飼になされ候御秘藏の鶴あり、然るに西山の近邊の百姓彼鶴を一つ殺し候。此科にて其者牢舎仰せ付られ候、尤も御秘藏といひ右の者訖と死刑に仰せ付られ候はんと人皆存じ候處に、西山公彼の鶴殺しを御手づから、御せいはいあるべきよし、御目附五百城茂太夫に仰せ付られ候につき、茂太夫承りて是を下知仕り、彼の罪人を御庭へ引出し候。西山公御出遊ばされ御刀を抜かせられ、彼の鶴殺しが側へ御立寄、にくき奴かな、鶴を殺したるがよきか、これがよきかと仰せ候て、四五度御刀を彼が肩に御あてなされ、つと

御刀を振り上げられ候て、あはや最期と人皆守り罷在候處に、ふと御見かへり中村新八に仰せ候は、此者を殺す事道にあらず、たすけ申べしやと仰せられければ新八をはじめ、相詰候近侍の者共一同に感し奉り、口々にありがたき思召の由を申し候へば、さらば許すとて、死刑をなだめ、御追放仰せ付られ候。扱御存知なき分にて役人に御さしずありて御内證にて當分彼の者何方へも落着せん迄の貯へとして、飯米、路金等を下され候。其仔細はかやうなる者は食物これ無くては別に復た如何様の悪事を仕るべきも知れざるものなれば、當分飢ゑ申さず候様にとのこと也。

西山公仰せらるゝは鶴を殺し候ものの儀は天下にも我家にも定れる大法の刑あり、殊に西山にて秘藏して飼へる鶴を故なく殺し候段重々の大罪、甚だ憎く、ささみてもあきたらず候へども是は我身計にかゝり候事にて、我腹立をさへ忍び候へば助け候とも法度の妨げにも成り申すまじく候。人一人殺し候事は大切なる事なり、況や禽獸の故に人を殺すことをやと存じ候念、忽ち心中に浮み候や否や、頻りに不便にな

り助け候と仰せられ候。

義公の如き仁君でさへ一旦は彼の鶴殺の男を殺さうと思召したと見えま
する、併し直に御後悔あつて不便に思召し、其命ちを許すのみならず、
飯米路金迄も賜はりて追放せられたのは比類なき御慈悲深き行ひで御坐
ります。吾々御互の如き淺慮なる者は動もすれば人を害し、人を傷ふ
心が起るもの故、常に用心して我と我心を修めねばならぬのであります。
九、善惡混在説の缺點。然らば善惡混在説は人生の真相を看破したもの
で、完全なる學説であるかといへば左様ではない、何となれば人間に本
來善惡の兩性が具はつてありますならば、善も惡も吾々の本性より起る
自然の行爲で、天の命ずる所と申して宜しい。故に吾々は善も惡も同様
に見做して善として賞すべきに非ず、惡として罰すべきに非ずと考へね
ばならぬ。善も公々然と爲し、惡も公々然と爲して差闕ない筈である。
然るを人は善を好み惡を惡み、表面に善を爲して裏面に惡を爲すは如何
なるものであらう。是れ善惡混在説の未だ完全ならざる所で、此説に由
る時は善の爲ざるべからざる所以、惡の避けざるべからざる所以を説明

人 間 の 本 性

第

二

席

する事ができませぬ。且つ吾々は教育を盛にし人の智徳を磨いて益々人
を善道に導かんと努めつゝありますが、人の本性にして善惡混在のもの
ならば如何に教育しても其本然の性を無くすることはできぬ、従つて人
を善に導かんとするも無効とならねばならぬのであります。
十、善惡共無説の當否に就て。そこで第四に善惡共無説と申して人性は
善でも惡でもないといふ、蘇東坡や胡五峯などの説が一方に唱へられた
のであります。此の説に由りますると人の本性は元來善惡を以て論ずべ
きものでない、遙かに善惡の表に超然たるものである、故に善でも無く
惡でもない。併し善でもなく惡でもないから、之を導いて善ならしむる
時は善となり、之を導いて惡ならしむる時は惡となる。譬へば山上の湖
水の如くで東にも流れず、西にも流れぬ、併し之を導いて東に流れしむ
れば東に流れ、之を導いて西に流れしむれば西に流るやうなものであり
ます。又白い糸の赤くもない青くもないのが、赤く染めれば赤くなり青
く染めれば青くなるやうなものである。始めより赤いなれば青くはなら
ぬ、始めより青いならば赤くはならぬ如く、人の本性が始めより善なら

ば悪にはならず、始より悪ならば善にはならぬ筈である。然るに人の本性は善も悪もない者であるから、善にも悪になることが可能なのであるといふやうに申すのが善悪共無説の大體で御坐ります。

此説も一應尤に聞えますするが、善悪の無いのが人の本性としたならば、人間の行爲に善悪の起る理由はないことになりす。何となれば無い種子は生への道理で善悪の性なき人間が善悪の人となるといふは奇妙なことで吾々には理解することができませぬ。山上の湖水の譬喩で申しても、元來湖水に東西に流るゝ性質があるから、之を導いて東西に流れしむる事ができまするので、元來東西に流るゝ性質が無ければ決して東西に流るゝ筈はない。白絲の譬喩も其通りで、白絲は赤くも青くも染るべき性質が元來あるから青くも赤くもなりす。白絲が青くも赤くも染るべき性質が無いなら如何に染め様としても染らぬ筈である。されば此善悪共無説も充分完全に人生の事實を説明するに足らぬと言はねばなりませぬ。

十一、善の種々なる階級。以上支那に於ける人性論は皆それ〴〵一應の道理ある學説でありますが、熟ら吟味して見ますると何れも缺點があり

まして充分で御坐りませぬ。そこで今度は禪學や陽明學で説く所の人性論を御話することに致しませう。

禪宗では自己の本性を明めるとか、心性を徹見するとか申して、吾々御互の本性を看破して、其本性の命ずるまゝに行爲を發するを目的として居ります。然れば悟道といふは人性の真相を觀破すると申しても大なる誤謬はないのであります。今極めて解り易く説明をする爲に私自身の考ひから申し述べませう。

世には悪人はなく、邪惡のことは存在せぬといふが私の考ひであります。何故かと申すに世間のことは皆善のみで其善に大小廣狹の差があるのみで御坐ります。詳言すれば第一席の萬有一體論で申上げて置いた通り、天地間の有生無生一切の物は吾と一體なりと悟りまして無生物に至るまで之を毀傷するは吾身を毀傷するやうに感じて仁惠を施す人あらば其人の行ひは最大最廣の善であります。其次は無生物までは仁を施さずして所有有生物と吾と一體と爲りて彼等の損傷を見ること吾身の損傷の如く感じて救護の勞を執る、これは第二位にある廣く大いなる善であります。

其次は其恩が植物までは及ばずとするも、動物は我子の如く、我手足のやうに勞はる人がある、これは第三位にある善であります。其次は其恩が禽獸には及ばずとするも人間全般に對しては一體の思ひを爲して手足の頭目（頭）を救ふが如く相愛し相助けて生活する、これは第四位にある善であります。其次は人間全般は同體の如くする事はできぬが、同人種に屬する人に對しては同心一體の如くする、これは第五位にある善であります。其次は廣く同人種と同心一體と爲る事ができませぬが、同國民に對しては全然一身一體の如く感じて憂喜苦樂を共にする、これは第六位にある善であります。其次は一縣、一市、一町、一村等の人々と同心一體となつて苦樂を共にする、これは第七位にある善であります。其次は己れの一家族のみと同心一體となつて苦樂存亡を共にする、これは第八位にある善であります。其次は己れの一家族をも顧みず自己一個の安樂幸福を企圖する、これは第九位の善であります。此の如く善にも大小廣狭の差別階級がありますが何れも皆善なるに於ては同じい。かくして世に悪人と稱せらるゝものを見るに多くは自己の安樂幸福のみ

を企圖して我家族や他人を顧みぬ者、又は自己の家族のみと同心一體となつて他人の家族や國民とは一體とならぬ者であります。されば所謂悪人は第九位又は第八位にある善人で御坐ります。近頃新聞に喧傳せられたる悪人（注）では野口男三郎や出齒龜が其尤なるものでありますが、彼等とても我身の安樂幸福は勿論、其家族と同心一體となつて苦樂を共にしたる善人でありませんが、彼等の善は極めて狭く小なるもので家庭の外に及ばぬ爲に他人の福利を犠牲にする、そこで悪人と呼ばれのである。併し彼等は本性に於て悪なのではない、やはり善人である、何となれば志士仁人の行ひも彼等の行ひも廣狭大小の差があるのみで、性質に於ては同じであります。

十二、善人と悪人とは五十歩百歩のみ。茲に一人の愛國者がありまして其國家の爲に盡瘁して非常の功を奏したならば其行ひたる善に相違ありませんまい、併し愛國者なるものは往々其國家以外の人には害を興へる場合がある、外人の福利を犠牲にする場合は往々ある、日本の爲に計れば露國の爲にならず、英國の爲に計れば佛國の爲にならぬ場合がある、け

れども其國民は己れと同心一體であるから愛國者の行ひを善と認める。若し此愛國者の行ひを善と認めるなら出齒龜や男三郎の行ひも亦善と認めねばならぬ。何となれば出齒龜や男三郎も其家族とは同心一體にして苦樂を共にし他人の利益を害したに過ぎぬ。是を以て愛國者が自國の爲に計つて他國に害を興へると同様で其間には大小廣狹の差こそあれ、其性質は同じである、されば出齒龜男三郎を呼んで悪人といふならば愛國者も悪人と言はねばならぬ、愛國者を善人と呼ぶならば出齒龜や男三郎をも善人と呼ばねばならぬのであります。同様に豊臣家の忠臣は徳川家と大敵となり、徳川家の忠臣は豊臣家の爲には大悪漢である。大石良雄は忠臣の龜鑑であります。吉良家にとつては悪い男である。何れにしても一藩の爲に計れば他藩の害を爲す場合が多い、此等を忠義の士といふならば出齒龜も男三郎も忠義の士である。唯彼等は其家族の爲に忠なるのみで至極範圍が狭いのみで、其性質には異なる所はないのであります。果して然れば世に謂ふ所の忠義の士と不忠不義の悪漢とは五十歩百歩の

相違で共に善たるに於ては一である、故に悪漢も己れを愛するの心を擴充すれば其儘善人で、盜賊も己が家族を愛する一體の念を擴充して他人に及ぼせば其儘義人であります。十三、人性は絶對善なり。是に由て之を觀れば人は一人として其性の善ならざるはないのであるが、哀しい哉小人は萬有一體の念を狭小なる範圍に止めて、之を擴充する事を知らぬ。そこで悪人と呼ばれるのであります。此の如く天下の人は皆善性を具へた者でありますから、所謂悪人も一旦翻然として改る時は忽ち善人と爲る。若し悪人が性質上悪い者であつたなら、其性質が急に手の掌を覆すやうに俄然として變化する理由はない、本來善性で善人であるから、少しく其善性を擴げれば宜しいのであります。釋尊が一切の人を善男子善女人と呼ばれて、一も悪人なる語を用ひ給はず、禪宗の第六祖慧能禪師が凡ての人を善知識と呼ばれたのは之が爲である。果して然れば人性は悪はなくて善のみである、善のみとすれば善の名もない、何となれば善は悪に對する名であるから。悪がなければ善

もない、即ち人性は絶対善で、悪と對する善ではありませぬ。此絶対善を無上善とも至善とも申します。

人性が至善なるを看破しますれば所謂本來の面目を見たので、人心の本來清淨なるに悟入したのであります。而して此至善説は前に申し陳べました四種の説を悉く包容して居ります、何となれば人性の悉く善なるを論ずる所は孟子の説と同じく、善に大小廣狹あるを示す所は善惡混在説と同じく、性惡説の主意も自然に含まれ、絶対善と論ずる所は無善無惡説と同じであります。故に至善説は以上四説の粹を集めて大成したかの觀がある。

十四、王陽明の至善説。王陽明は人心の至善なる事に著眼致しまして、無善無惡是心之體と申して善惡相對せざる絶対の善なるを説き、孟子の意を承けて良知良能は人心の固有なるを論じました。良知とは是を是とし非を非とするの心で、明らかなる鏡には美しき物は美しく、醜き物は醜く映ずるやうに、良知の鏡には善惡邪正其儘明白に映じて少しも味ます所は無いと申すので御坐ります。

陽明の説きましたる良知は倫理學者などの申す良心とは少しく異つて居ります、何となれば良心には其起原や發達などの論がある、されど良知には其様な事はない、本來人心に具有したるもので、且つ始めより完全で發達するものでないとしてあります。而して良知に發達進歩あるが如く見えるのは良知を障礙する私欲の次第に薄らぐのである。譬へば天日の如くで、何人の胸中にも良知の天日を持たぬ者はない、然れども悪人や惡漢は良知の天日が私欲の暗雲に蔽はれたる事風雨晦冥の日の如く、また平々凡々の吾々御互は曇天の日の如く、聖賢君子は晴天白日の如くである、と陽明は申してゐます。然れば風雨晦冥の日でも、曇天の日でも、晴天白日で天日には少しも變化はない常に晃々として完全圓滿のものである、即ち良知の人心に於けるは千古一日の如く少しも變化はないのであります。要するに王陽明の説に従へば人間には皆自然に良知が具はつて是非邪正を辨別する力がある、これが人間の本心本性で、陽明の語で申せば天植の靈根であります。加之、良知は本來完全圓滿にして賢愚によりて差別があるでは無い、また古今東西の人に普遍にして且つ常住不

變のものであります。

十五、王氏の生死解脱。王陽明の良知説は彼が百死千難の中より得來ると申しまして、千辛萬苦の末に悟入したる學説で、上は三王の教に照らし、下は天下萬世の教として毛頭過ちが無いと確信した所であります。陽明が良知を悟りますには非常なる艱難を経たので、即ち一たびは宦官劉瑾に憎くまれ、獄に下され四十杖の笞刑を受けて殆んど死して後に蘇り、それより貶謫せられ再び杭州にて炎暑の爲に病んで斃れんとして之を免れ、三たび刺客に捕へられて九死の中に一生を得、四たびは江中に身を投じて死せんとして死せず、五たびは猛虎の爲めに喰はれんとして之を免れ、六たびは龍場と申す處で瘴煙蠻霧の爲めに斃れんとして幸に之を免れ、死生の間に入出して精神を鍛錬したる結果、最早、世の榮辱、利害、得失等が胸中に滞ることの無いやうになつたけれども、尙ほ生死の一念が胸中に滞りまして解脱することができぬ。依て巖石を穿ちて石梯の如くに致して晝夜其中に端坐工夫して遂に悟入しましたのが陽明の良知説であります。

第 二 席

か、れば彼が悟入した所は生死の大事迄も明めて金剛不壞の大確信を生じたので、禪宗の大悟と同様な精神状態に達したのでありませう。故に陽明は良知の二字は孔門の正法眼藏なりと申して、彼が學問の大本とするので御坐ります。此良知の本體を失はずして常に其指導に由て公明正大の氣象を發揮する時は如何なる艱苦の境遇にありと雖も少しも憂ひず哀まざることができ、假令九死の淵に沈むとも從容自若たることができ、生死を解脱した境界となるのであります。

十六、禪の自性清淨心。禪宗では陽明の所謂至善の本心と呼んで自性清淨心と申します、六祖慧能大師が

我本性は本自ら清淨なり

といはれ、圭峯禪師が

一切の有情に本覺の真心あり、常住清淨にして昭々として昧まらず了々として常に知る

と申されたのは此事であります。是を以て禪宗の修行は我清淨なる本心を明らかに、其清淨なる心徳を汚さぬやう、換言すれば正念を相續して事

に當り物に應じて、本心を失はぬやうするので、坐禪致すのも本心清淨の光明を晦まされぬ工夫をするに外ならぬのであります。

故を以て禪宗の第五祖弘忍禪師の御弟子で神秀大師と申す御方の偈に

身是菩提樹 心如明鏡臺

時々勤拂拭 勿使惹塵埃

とありまして、我身が菩提の道を踐むべき器で、我心は本來清淨にして明鏡の如くである、併し私欲妄念の塵埃がかゝる爲めに本心の明鏡が汚されて、善惡邪正を明かに映す事ができなくなるから、時々に勤めて拂ひ拭ふて置けと申すのであります。然れば坐禪工夫といふも心徳を明かにするより外に要事はないので御坐ります。また六祖大師の偈には

菩提本無樹 明鏡亦非臺

本來無一物 何處惹塵埃

とありまして、人間の本心本性は皆悉く清淨なるものなれば私欲妄念の塵埃の爲に汚されべき者でない、凡夫も愚人も聖人や佛と同様なる完全圓滿の智徳を具へて居る、然るに此本性を徹見せぬ爲めに凡愚に安んじ

て居るのである。人性は本來絶對的に善であつて一切衆生が其儘佛である、既に惡がなければ之に對する善も無い、煩惱がなければ之に對する菩提もない、塵埃がなければ之に對する明鏡もない、一言に謂へば本來無一物であると申すので御坐ります。

本來無一物と申すと空々蕩々として一物もなく大虚のやうな事と思ふ人がありますが、それは大なる誤解で、本來無一物とは絶對至善なる事、絶對清淨なる事を申したので、禪宗の人性論を根本から示されたものであります。

想ふに六祖大師の偈は上根上智の人が吾々御互の本來の面目を看破して、本心は清淨にして塵垢の附くべきなく、妄念の起るべきはなしと達觀して、心を正念に住せしむる工夫で、聰明利根の人に最も適したる教へである。又神秀大師の偈は絶えず自己に反省して妄念を起してはならぬ、私欲を逞うしてはならぬと思ふて心鏡を刮磨する工夫であるから最も中下根の人に適した教へであります。されば六祖神秀二大師の教を並用したならば上中下三根の人が悉く入道の捷徑を得るに相違ないと思ひます。

十七、西山公仁徳の諱。人には本来良知があつて、清淨なる心徳を具へて居るものでありますから、随分無智蒙昧なる者にも忠孝仁義の行ひのあることが御坐ります。

昔し水戸領、那珂郡村松村に治兵衛といふ貧しき百姓あり。父をば瀨兵衛とて七十に餘れり。治兵衛つねく父に仕へて孝心なり。元祿十二年父瀨兵衛重く惱みて終に息絶候。治兵衛泣き哀めるも理に過ぎたり。さてしもあるべき事ならねば親類并に入魂の者共打ち寄り、治兵衛が父の骸にとりつき離し兼候を、無體に離し、棺に納めし處に一町餘り過ぎて治兵衛申候は、父蘇り候事必定なり、棺の中に息つきの音儘かに聞え候迎、強ひて棺をあけ父が骸を取出しけれども、蘇生は致さず候。此折節、西山公那珂の濱へ御通り遊ばされ候が、興ある事ありて彼の村の龍藏院と申す寺へ御入候處に、蘇生の者ありと諸民言ひ合へるを、御醫師鈴木宗印御供にて候ひけるが、いつも御供先によらず、急病あらば御用を差置、早速參り療治仕候様にと兼て仰せられ候故、其儘彼の家に到り、薬を用ひけれども、息もなく脈もなく、薬も

咽に入るとも見えざりけるが、自然と藥胸中へ流れ入候。良暫くありて誠に蘇生せり。依て宗印立歸り、上の藥筥より御藥供を取出し、調合仕り用ひ候へば瀨兵衛彌々元氣儘になり候。治兵衛手を合せ宗印を拜み歡ぶ事甚し。其後宗印歸て御前へ出ければ、何方へ參り候や見えざる由御尋ねありける。因て件の趣を申上、且又治兵衛孝行なる者故、天の恵みにて及ばなき御醫療に會ひ奉り、瀨兵衛蘇生し候ものと存候由、彼家へ集り居り候百姓共、口々に申候と御物語仕候へば、西山公仰せられ候は誠に我此處へ來らずんば誰か醫藥を與へん、彼者孝行の徳に感じ天我をして此處に至らしめ、汝をして彼者を療治せしめ給ふなるべしとて、殊の外御喜色で、貧しき百姓の由に候へば、定めて食物も宜しかるべからず、白米、鹽、味噌、野菜、干魚、生魚等御膳に用ゆる所のものを以て彼に送り與ふべき由仰せ付られ候。役人は承はりて品々持せ遣はし候。且又翌日其地御立の節、彼家に御立寄候て治兵衛を召出され、随分看病仕るべき由仰せられ、御手づから金一包御投下され、村の役人を召し宗印方へ病人の容態汕断なく申越、藥取寄

せ用ゐさせ候様に仰せ付られ候。此段は西山公御逝去の歳の事なり。
また、

茨城郡玉造村の中の濱と申す所に彌作といふ者あり、家至て貧し。父は早く死して母老いて腰拔となれり。彌作は性極めて愚鈍なれども母に仕へて孝行なることはおさく聖賢にも耻づべからず。彌作妻と共に心を協せて渡世を營み、母を養はんと存候に其妻いつとなく病身になつて力を合すること能はず。彌作思ひけるは斯くては母の養ひも却て闕くことありなんとて、あかぬ中ながら妻を去て母と我とのみ住みけり。元來田畑も持たざりければ人の田畑を受作と云ふ事にして作り、扱田をすき畑をうたんとする日は母獨り家に居らしめん事を痛み、業にて笈などのやうなる物を組み、母を乗せて負ひ、前には農具をかへ、手には母の飢渴を助けんため、食物并びに薬罐に茶を入れて携へ往き、其所に至りぬれば夏は涼しく冬は暖かなる方を求めて母をおろし居て、田にあれ畑にあれ一うね二うね、うないぬれば母が側へ寄り顔色を伺ひ、ものいひ慰め、茶、酒、食事など望みに任せて之を侷め、

田畑をうなひ申候。母常に酒を好み日毎に酒を求め貯へて乏しからざらしむ。家にありては日夜心を盡せる事、策にも盡し難し。時に延寶の始め西山公此事を聞き召し及ばれ西領へ御出の節、彌作の門に御立寄、彼の者を召し、金一すくひ、左右の御手をならべ、御持候て彌作が頭の上に差置かせ給ひ、孝行の段御褒め遊ばされ、此金を以て母を心よく養ひ申すべし。此金我與ふる所に非ず、天より汝に與へ給ふ所なりとて下され候。扱處の役人を召し、彌作勝れて愚鈍なる者と聞き及ばれ候、此金人に奪ひ取らるゝ事もあるべし。汝等能く計らひ田畑をとゝのへとらすべし。亦向後ねんころに仕るべき由仰せ付られ、彌作が傳を御書かせなされ候。

とある、さすれば無教育なる百姓衆にもまた天性愚鈍なる者にも皆完全に善良なる性質は具つてあるので御坐ります。然るを吾と吾良知を味まして悪い事をするは所謂自暴自棄で、誠に憐れむべきであります。吾々は一日も早く本心本性の至善なるを確信して身を立て徳を積まねばならぬので御坐ります。

徳行の基礎（第三席）

一、王陽明の道心人心と禪の真心安心。前席に於ては人間の本性は至善なる事を御話致しまして人は善悪賢愚の別なく皆其本心は佛と異る所なき趣を説きました。が、吾々凡夫の哀しさには動もすれば此本心本性を打忘れて、我儘勝手の手を起し、私欲忘念の止む時はないのであります。されば吾々凡夫の平常の心は大段二つに分れまして

本心と私心、道心と人心、天理と人欲

と申すやうになつて居ります。陸象山は本心私心と申し、程朱等は天理人欲、本然の性氣質の性などと申し、王陽明は道心人心、天理人欲など申して居る。之を禪宗で

真心と安心、菩提と煩惱、真如と無明

などと名つけてあるが名は異れども指す所は一つのもので御坐ります。王陽明の申す良知、禪宗で申す真心とか佛性とか稱する者は人心本具の妙徳で、是を是とし非を非として一毫も味まざる靈智でありますから、

徳 行 の 基 礎

第 三 席

譬へば秤が物の輕重を公平に示して少しも偽のないと同じやうである。

故に此真心を名つけて至誠と申したら宜しからうと思ふ。

二、命と理と性との合一。此真心、即ち至誠は何故に吾々の本性である

かといへば、此至誠は天地間に遍在する正大の氣で、

天にあつては命と謂ひ、物にありては理と謂ひ、人にあつては性と謂ふ

ので、天命も、天理も、人性も同一なる至誠の異名であります。何となれば天に虚偽といふものは少しもない、日月に私照なしと申して、公明正大に高山も幽谷も、人間も畜生も、平等に其光明を受けてゐる。また天體の運行から見ても各々の惑星が其軌道を誤らず、四時循環の序に於ても、風雨晦明の變に於ても毫髪ばかりも虚偽はない。されば地上の萬物も其通りで水は偽りて流れず火は偽りて燃えず、花は偽りて咲かず、草は偽りて緑ならず、鳥は偽りて歌はず、獸は偽りて走る事はない。人間も天より命ぜられたる生病死は如何に手段を盡しても免るゝ事はできませぬ。果して然れば天命とは一分一厘、偽りの無い、最も嚴格なるも

ので、猶ほ秤の公平無私にして一分一厘の偽りを用ゐぬと同じやうである。故に天命は所謂至誠で、吾々の真心と同じであります。次に天理とは何であるかといへば自然界に普遍なる法則に外ならぬ。自然界の法則として最も確實なる者は何であるかと申せば因果律で御坐ります。此因果律ほど嚴格なるものはなく、又これ程普汎なる原則は宇宙にない。因果律とは原因あれば必ず結果あり、結果あれば必ず原因ありといふことで、物事は偶然に生起することはないといふ道理を示したのである。之を道德上に應用したのが佛教の善因善果、惡因惡果の説で、吾々の確信して疑はぬ所であります。自然界の萬物は一として此因果の法則に支配されて居らぬものはありませぬ、即ち原因がなくて結果があるといふやうな偽りや、原因があつて結果がないといふやうな偽りは自然にないので、天下の事物は皆至誠の理に支配されつゝあると謂はねばなりません。換言すれば萬物の理といふも至誠の異名であります。且つや自然界の萬物が至誠にして偽りなき因果の理に支配せらるゝと同時に、吾々御互の心にも因果の理を外にして考ふることはできぬのであります。

て、如何にしても原因なき結果、結果なき原因は考ひられぬ。これ人心の至誠と物理と合して一なる所以で御坐ります。要するに天命といふも、天理といふも、物理といふも、性といふも等しく至誠の一に歸するのであります。

三、天意を體認するを要す。故に吾々御互は勉めて天の至誠なる御思召を體認して偽り、飾り、諛ひなどせぬやう致さねばなりません。前席に申上げた水戸の義公の話に下のやうなのが御坐ります。

西山公御隠居後、或時御心安き出家衆五七人御招請なされ、例の御詩歌あり。扱御酒宴に及んで古戦場の物語等これありしに或僧申されけるは、唯今戦の儀もこれあり候は、坊主頭に冑を戴き、御馬の前に進み、御用に相立申べく候。御家中衆は各々妻子御座候間、何んとしても其方へ心引かれ申すべく、拙僧などは妻子無之候間、何も思ひ残し候事御座なく潔く戦場へ罷り出、討死致し御目に掛べく候と、思ひ入りたる様子にて申され候へば御座中一同に感心申候。然る所に馬場佐五右衛門末座に罷在候て、兎角の儀も申さず候を、西山公例の御目早

にて御見とめ、御氣色替り、佐五右衛門を近く召され、其方一人何の挨拶も仕らず候は如何なる所存に候や、急度申すべしと仰せられ候。佐五右衛門申し候は唯今の物語、拙者は少しも尤に存せず。先づ出家と申すは柔和忍辱を面に仕る事にて假令心に左様なる存念御座候共、口外なされ候段不似合のことと存じ候。其上一日なりとも祿を頂戴仕候者共、誰か妻子に引れて戦の節、わるびれ申す者あるべきや、不案内なる申し様と存じ候。依て何の挨拶も仕らず候と申上候。西山公兎角の仰もなく、甚だ御腹立の様子に、佐五右衛門は御前を罷立候。座中興さめ候ひて、兎角して御氣色も直り、重ねて興を催ほし、御客僧衆、夜半に罷還り候。佐五右衛門定めて暫くは御目通などへ出候儀はなるまじと存じ候所、翌朝佐五右衛門を召され、何となく仰せらるゝは其方は病身なれば常に杖をつき候はんと思召候、杖は如何なる杖をつき候やと御尋ねなり。佐五右衛門夕の事につき強き御叱に會ひ申す覺悟に罷在候所、思ひもよらぬ御尋ね哉と存じながら、御山にて鼠さし(木の)を切り杖に仕り候と申上候。其時西山公御座を立て、おんのよ

れ(木の)の八角に削りて握太なるを御持なされ、こゝは山中なれば狐狼の用心に此杖をつき申すべし、亦人たりとも追従輕薄なる腰拔は唯一打たるべし、秘藏してつき候へとて下され候。是に依て存じ候へば背の直言の御褒美と相見え候。其杖佐五右衛門が家の重寶に仕り候。却説右の物語の中にある僧は西山公の前で追従輕薄、口から出任せに出家にあるまじき荒々しい事を申しました、これが天意に背くと申すもので、佐五右衛門の申す所、并びに西山公の御思召は少しも偽り飾りが無い至誠の天意に契ひます。かくてこそ仁君とも忠臣とも申さるゝので御坐ります。

四、仁愛は天意に出づ。天の意は物を生ずるにありますから、天地間の物には皆生意があつて、生々化育せんとする欲望を有たぬものはありませぬ。されば農夫が一粒の米を地に蒔きますれば忽ち萬倍となつて收穫を得られます、人間にありましては一圓の金を百圓にして返して呉る人はなく、千圓にして返して呉る人は尙ほさらない。然るを天地の恵みは廣大なるもので一粒が萬倍の收穫となるのであります、故に吾々は天地

に對して感謝の念を忘れてはなりません。天地の恩澤に感謝する心がありますれば一畝一步の田地でも等閑にするやうなことはない、深く耕し厚く糞つちかふて豊かなる天の恵みの收穫を受くるやうになる、そこで家々給し、人々足りて國家富強の基となるのであります。

且つまた農夫が少し種子を蒔けば少し收穫を得、多く蒔けば多く收穫を得、少し肥料を施せば少し繁茂し、多く肥料を施せば多く繁茂して毛頭偽り欺く事のできぬのが天地を對手かたてとする農事であります。天地ばかりは人間の猿智恵で偽り欺く事はできません。農業のみでは御坐りませぬ、大工が家を作り、左官が壁をぬり、石屋が石を扱ひ、仕立屋が衣服を縫ひ、お三が御飯を炊くに至るまで、天の恵みと其至誠の徳がなければできぬものではありませぬ。即ち大工が用ゐる木材も、石屋が扱ふ石材も、仕立屋が縫ふ絹や木綿も、お三が炊く米麥も皆天地の德澤で出来たもので人間の創作したものは一つもない、其上、木材も、石材も木綿も、絹も、米も、麥も、人間の偽りにのせらるゝものはない、正直なる規矩準繩で一分一厘も違はぬ法則に依らねば木も石も木綿も絹も取扱ふことは

できませぬ。お三が御飯を炊くにしても一杓の水を少なく釜に入れば御飯はそれだけ硬くなり、一杓の水を多く入れば御飯はそれだけ柔らかくなりまして、毛頭偽り欺く事はできません。故に人たるものは天地の德澤の有難きを體認して天地の正直なる心を以て心とせねば何事も成就致しませぬ。相馬家復興の大事業を成し遂げましたる

富田高慶は其齡尙ほ十七歳の時、相馬家の亂れくて居るのを慨嘆して興復の重任に當らうといふ大決心を起した。さうして先づ第一に勉學をせねばならぬといふ所から、江戸の聖堂へ向て出掛た、餘程來たと思ふ頃、母が追ひかけて來て息喘いきあせいはるゝには「此事が成らずは斷じて歸つてはならぬ。」此激勵に感奮したる高慶は江戸へ出て一生懸命に勉強して世間から俊才を以て目せられ、各藩から招聘せらるゝも斷じて謝絶し、一意専心相馬家興復の道を逢ふ人毎に問ふたけれども、一人として教示して呉る者が無い。そこで此事を苦にし心配を重ねて大病になつてしまつた。所が至誠神に通ずるともいはうか、或醫師が段々と病氣の原因を聞いて、それなれば自分の知つて居る二宮尊徳先

生を紹介するから、行つて聞くがよい、先生なれば千里を距ても尙ほ興復せらるゝ大人物であると教へられ、喜び勇みて忽ち全快し、下野國櫻町に居られた二宮先生を訪ふた、時に富田は二十七歳であつた。早速富田は二宮翁に面會を求めたが、我寸時の閑だになし、面會すること能はずと言はれて、中々逢ふてくれぬ、それでも少しも屈せず貧しい生活を續けて日々面會を求めて止まない、斯くすること五月から九月迄五ヶ月間、二宮先生もその誠心に感じて遂に逢はれたとのことである。

そこで二宮先生は諸所の仕法書を富田に示した、示したは示したが、それきり何とも一言も教へられぬ。富田も之は詰らぬこととも思はなかつたであらうが、同じ事を繰返し、且つ餘り面白味のあるものもないから、傍ら算術の稽古を始めた所が、之を見た二宮先生は「玉をはじく機では興復の大業は出来ぬ、玉をはじかせる度量がなければならぬ、相馬にも算盤の出来る人位は居るであらう、此等は末の末たることで、大計大法の根源を樹つるが必要ではないか」と言はれた。

富田が二宮先生の宅で修行中は寒中でも足袋を用ゐず、綿入を着ず、苦學を重ねて居つたから、相馬の君公も大いに氣の毒に思はれ寒を防ぐべき手厚い物品を贈られた所が、富田の言ふには藩内の民は貧窮にして實に困難を極めて居る、其民を救はうとて我は勉學をして居るではないか、之を思へば寒氣を防ぐものなきも寸毫も苦痛はない、假令苦痛があるとしても民を思ふ苦痛に比せば言ふに足らぬ。若し我を思はれる心あらば民の幸福を圖りたい、吾のみ獨り樂々と賜はりたる衣を纏ふべきやとて、遂に其物品を受けなかつた。

又或時富田は熱病に罹つて病勢益々重くなつたので二宮翁も非常に心配して郷里に歸した方がよいと思はれて、其旨を告げらるゝと、富田は「さうですか、夫は御親切恭けないが、私は死ぬとも決して歸らな

い、私が病氣だといつて此儘歸つてしまへば相馬藩の爲に私の意思を繼いで、翁の教を受けに此處までくる者は恐らく一人もあるまい、繼

令ば私が死んでも此處で死ぬば相馬藩中一人位は私の意思を繼いで來

る者があるだらうから、御迷惑でも置いてくだされ」といふた。翁も

そんな理窟をいふ位なら死ぬることもあるまいとて置くことにした。其後病氣も全快し、年三十七歳、仕法を充分研究して二宮翁と別れ、翁の代理としていよく相馬の興復に着手した。其時の誓願は

▲ 祿 を 受 け ず

▲ 賞 を 受 け ず

▲ 名 利 を 追 は ず

とあつて、自ら開墾して、自ら食し、一粒の米をも主君から受けずして、遂に大業を成就した。

思ふに富田高慶は古今無雙の忠臣であります、大石良雄等も忠臣ではありませんが主家が滅亡した後、主君の爲めに仇を討つて己れ等も亦死んだのであります。富田は單身隻手で主家を未だ滅びざるに興復して一藩の人民を救ふたのであります。されば大石等の行跡は今日の吾々が模倣することのできぬ事であるが、富田のはさうでなく何人が模倣しても少しも弊害のない有難い行ひであります。殊に祿を受けず賞を受けず名利を追はずてふ大決心は天地の心、神佛の心で、此上なき神聖なる精神で

あります。天地は如何に百穀草木を生ずるとも吾々より祿も受けず賞も受けさせぬ、神佛は如何に吾々を恵み給ふとも名利の爲めや報酬の爲めではない、此天地神佛の心を心としたる富田高慶の大決心は唯一の至誠でありますから大業ができたので御坐ります。

五、諸徳を一貫せる準則を要す。上來陳べましたる所は吾々御互の本心なる至誠は天に在つては命となり、物にあつては理なる趣を説明致したのであります。これより進んで此至誠が道德の準則となることを御話し致しませう。

世間普通の人の考へでは仁義禮智、忠信孝悌の如き徳行は何故に吾々がせねばならぬかと申しますと、先づ親は吾々を養育して呉れたもの故、此養育の恩に報いん爲めに孝行はせねばならぬ。又御主君は吾々を恵み給ふもの故に此御恩に酬いる爲に忠を盡さねばならぬ。師友は相互に切磋琢磨し、又相助け相救ふもの故、其情誼に對して敬信せねばならぬといふやうに申すのであります。これは一應尤なることではあります。支離の病と申して徳行の準則が離れぬになるのであります。何となれ

ば右のやうにのみ申しますと孝の理は親に在り、忠の理は君に在り、信の理は朋友に在り、仁義禮智の理も亦他人の身の上に在るやうになる。従つて一貫したる準則もなく、仁の理と義の理とは同じからず、禮の理と智の理とは同じからず、忠の理と孝の理とは同じからず、信の理と悌の理とは同じくないやうになる。斯くては吾々の徳行に一定の準則がないから支離の病と申すので御坐ります。

六、報恩主義の不徹底。且つ知恩報恩といふことは至極大切なことで親や主君は申すに及ばず、天下の人が皆吾々御互の恩人であり申すから、其恩に酬いるといふは人として爲さねばならぬ筈であり申す。然れども單に報恩とのみ申したのでは充分でないやうに思はるる、何となれば恩があれば恩に報ゆるが至當であるとしたならば恩がなければ恩に報ゆる必要はないといふが其裡面に照れて、恩が深ければ深く報い、恩が浅ければ浅く報いて差鬨ないやうに思はる。而して世の親たる人に種々ありまして吾子を愛育する者もあり、吾子を生み落して直ちに殺す者もあり、吾子を賣つて己れの身を養ふものもあり、吾子を教育する者もあり、

吾子を捨つる者もある。されば昔しの人捨子をするとして詠みました歌に

身に交さるものなかりけり縁兒は
やらん方なかなしけれども

とある。縁兒はやらん方なく可愛相であるが、我身にはかへられぬ故、捨子をするといふのでありませう。現在の事實から申しまして、何れの親も皆悉く慈愛に富めるものとは言はれませぬ、千葉縣にて一老人が不思議にも墮胎術を巧みに致し申した所が、此老人に乞ふて墮胎した母が千人以上に達し申して、非常なる犯罪人が出で申した。これは新らしき目前の事實で御坐ります。さすれば天下の母が悉く慈悲の塊かたまりとは申されませぬ、時としては鬼のやうな母もあるのが事實でありませう。従つて親の恩にも種々の程度があつて、浅いもあり、深いもあり、殆んど無いのもあると謂はねばならぬ、而して恩の浅い親には浅く報い、恩の深い親には深く報い、殆んど恩の無いやうな親にはどうでも宜しいとすれば、孝道に一貫の準則が缺けてしまふでありませう。

七、交換主義の病弊。同様に忠の理も君の上へのみ求ますれば仁君もあり、暴君もあり、賢君もあり、暗君もある。従つて之に對する臣民の事へかたにも種々ある、賢明の君で臣下を憐れむことが篤ければ忠勤を勵まねばならぬが、君主が狂愚で人民を虐待するのみなれば之に對して忠を盡す理由がないやうに思はれて、孟子の申したやうに殷の紂王の如き暴君は天子ではなく獨夫であるから殺して宜しいなどいふやうになります。これ亦忠の理を君主の身の上に求めるからのことで、斯様にしては一貫せる忠の準則はなくなつてしまふ。

加之、報恩といふは何となく交換主義の如く感ぜられて面白くない、即ち恩ある仁君には忠を盡し、恩のなき暴君は殺しても宜しいといふやうに申したならば交換主義、商賈根性のやうに見える所がある。譬へば隣家より饅頭を頂戴したから之に報ゆるに牡丹餅を以てする、朋友より胡瓜を贈られたから之に報ゆるに唐茄子を以てする、甲君より酒を贈られたから之に酬ゆるにビールを以てする、乙君より腐敗した菓子折を頂いたから之に報ゆるに溶解したる黒砂糖を以てする、丙君は常に墨や筆を

借りに来るから當方からも松魚節や烟草を借りにやるといふが交換主義で極めて薄情な主義である。報恩主義は右の様な薄情のことではないけれども動もすればこれに類した考に陥り易いと思ふ。

八、忠孝二道は至誠を以て一貫す。然らば如何にして支離の病を去りて諸徳を一貫せる準則を得ることができやうかと申せば、唯自己の本心たる至誠に求むるより外はありませぬ、孝の理は決して親に求むるには及ばぬ、本心の鏡が明かにして親に事ふれば是れが直に孝である。何となれば本心の偽りなき心を以て親に對すれば親と吾と同心一體となりまして、親の憂ひを以て我憂ひとし、親の苦みを以て我苦みとし、親の喜びを以て我喜びとし、親の樂みを以て我樂みとすることが出来る。従つて親の身が寒ければ我身が寒いと同様に感じて之を温かにし、親の身が暑ければ我身が暑いと同様に感じて之を涼しくする、是に於て乎、温清定省の孝順が自然に行へる。かくする時は慈愛深い親でも、無慈悲なる親でも、恩の深い親でも、恩の浅い親でも、吾を捨た親でも、吾を殺さんと欲する親でも孝順を盡すことができまする。舜が大孝と謂はる、所以

は舜を憎み、舜を殺さんと企てた兩親に孝順したからである。これと同様に本心の誠を盡して君に事ふれば、それが直に忠義でありませす。本心の誠さへ明かなれば必ず君臣心を一にして、君の樂みは臣の樂、君の恨みは臣の恨み、君の喜びは臣の喜び、君の辱は臣の恥となる。是に於て乎、君辱めらるれば臣死すの格言を實行することが出来る。果して然れば忠といふは至誠を以て君に事へること、孝といふは至誠を以て親に事へること、忠孝の名は異れども、至誠を以て一貫して居る、即ち至誠は忠孝なる徳行の基礎となる、而して其基礎は他人の身にあるのでなく、我心に具へてあるので御坐りませす。

九、仁義も亦至誠に外ならず。一般世間の人に對して吾々は仁義を以て交際せねばならぬ、這は勿論のことでありませすが、大抵の人は其理由を明かにして居らぬ、世人の考へは「情は人の爲ならず」とある俗語に現れてゐる如く、人を恵み、人を愛するも畢竟吾身の爲である、人を救ふて置けば何時か人に救はることがある、人の子を大切にすれば人も亦吾子を大切にしてくれるから情を人に施すがよいといふのでありませす。這は

前に申した交換主義に更に利己主義を加へたもので道徳上には價值がない。また報恩主義では世人は皆吾々に恩があるから此恩に報ゆる爲に仁愛を以て接せねばならぬと申しませす。併し世人には恩もあれば怨みもある何となれば現代は生存競争が劇烈で、何事をしても多少の害を他人に與へざるを得ぬ。日本人の成功は露國人の妨害となり、英國人の利益は獨國人の損害となり。一會社の繁榮は他の會社の衰亡となり、一商店の盛大は他の商店の破産を誘起するが如き場合が澤山ある。一個人の上から申しても一人が好い位置を得たとすれば其位置を望んで居た多くの人を失望せしめ、一人が美しい妻を娶つたとすれば其婦人を思ふて居た多くの人を失望せしめ、一人が佳い家屋を建てたとすれば其宅地に家屋を建んと希ふて居た多くの人を失望せしめる、加之、一人の子が新たに生れたとすればそれだけ吾々御互の地球上の住所が狭くなり、空氣は一人が呼吸するだけ多く不潔となり、食物は一人が食ふだけ減ずる割合でありませす。故に吾々は互に恩もあるけれども同時に怨みもあることは事實である、さすれば恩怨の二つを眼中に置く時は他人に對して仁愛を施し

かねます。依て此等のことは商量致しませんで軍に自己の本心に立歸り、至誠を以て人に交る時は自然に他人と吾と一體一心となりまして、仁義を行ふことができる。即ち仁といふも、義といふも、禮といふも、至誠一つで貫くのであります。

十、至誠は自己の寶藏なり。要するに吾々の本心なる至誠は一つであります。之を以て朋友に交る時は信となり、之を以て親に事ふる時は孝となり、之を以て長上に事ふる時は敬となり、之を以て君主に事ふる時は忠となり、之を以て夫に事ふる時は貞となり、之を以て妻子を養ふ時は愛となり、之を以て國家に盡す時は愛國となり、之を以て汎く人類に望む時は博愛の仁道となる。されば此等百般の諸徳を一貫する者は本心の至誠で、至誠なる一心の中には萬善皆備らざるはないので御坐ります。禪宗では本心を寶藏に譬へまして坐禪をするのを寶藏を開くに較べてある。吾々の清淨なる本心には上述の如く孝悌忠信、仁義禮智等一切の諸徳が具つてある、それを知らずして心外に向て仁を求め義を求め孝を求め忠を求めるのが迷ひであります。故に一たび外馳の心を收めて、本心

を明かにしますれば其中に諸善萬徳を見出すことができます。佛教の語にて申せば吾々は皆佛と同じ智慧徳相を具有しつゝある、然るを迷惑して自己即佛なるを知らずして他に向て佛を求むるのである。坐禪をするのは外馳の心を收めて本心清淨の至誠を味さぬ爲で、換言すれば正念相續の工夫であります。正念を相續し至誠に住するは所謂自己の寶藏を開くので至誠の中に具はれる萬徳の寶を受用することができます、即ち至誠を以て君に事ふれば忠の徳を得、至誠を以て親に事ふれば孝の徳を得る、乃至至誠を以て汎く衆人に臨む時は博愛仁道の徳を得るので御坐ります。

十一、坐禪と戒律の一致。坐禪は本心の至誠を明かにするの工夫でありますから、吾々に本來具有せる心徳を現はす方法であると申してもよい。佛教の語で申せば佛の自受用三昧に住するのであります。故に坐禪と倫理道徳とは離れたものではありませぬ。さるを世間の人は多く坐禪とは一種不可思議の力ある秘法の如く心得て、坐禪すれば何か奇妙なる道理が悟れるやうに誤解して居る者が多い。そこで坐禪と倫理とは何の關係

もないやうに思ふのであります。佛教の倫理は不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語など、綱目が擧げてありますから、消極的に思はれ、禁欲主義であると世人は誤解してゐる。殺生する勿れ、偷盜する勿れ、邪淫する勿れと申しますれば如何にも禁欲主義のやうでありますが決して左様ではない。大乘佛教の戒律は皆法性の徳を現はすのが主意でありますから、不殺生といふも殺生はしたくも止めて居れとの意ではない。吾等の本心に具へたる慈悲の徳を現はして一切衆生を感ひ所より殺生せないのであります。また不偷盜は本心に具へたる正直の徳を現はして一切の事物に當る所から偷盜せないのであります。同様に不邪淫は本心に具へたる貞潔の徳を現はし、不妄語は本心に具へたる信實の徳を現はすのである。果して然れば大乘の戒律なるものは消極的のものでなく、積極的に本心の諸徳を現はすもの、即ち自己の寶藏を打開するものであるから坐禪と同一で、決して二致があるのであります。

十二、道元禪師の一法究盡。上述の如く坐禪は本心の諸徳を現はすもの

なれば萬善萬徳を究盡するは坐禪であると申しても過言ではない。道元禪師が唱へられました宗義は一法究盡と申して一法を以て法界を究盡するのである、前に御話し致したる例にて申せば、本心の至誠は天にありて命となり、物にありて理となり、人にありて性となり、徳行にありては其基礎となる。故に天命も物理も人性も道德も、一の至誠を以て究盡する、自然法も、道德法も、天地人の三才も之に依て究盡せらるゝのであります。

坐禪は本心を明かにし至誠に住して萬善萬徳を受用する法門なれば之を以て法界を究盡するのが道元禪師の教へであります。孔子は一貫の大道を唱へられ、孟子が放心を求むるを學問の要としたのも此點に注意したからであります。中澤道二翁が東嶺禪師の説法を聞き交した所、禪師が

魚は水中に居て水を知らず、人は妙法の中に在て妙法を知らず。

と仰せられた時、豁然として悟入し、なる程妙不可思議の法は天地に充ちつゝある、鳥のカー／＼も妙法、雀のチウ／＼も妙法に外ならぬ、柳

の縁、花の紅、一として妙法ならざるはないと悟りまして、其後心學に入りて大いに力を得たと申すことで御坐ります。されば中澤道二翁の教へは妙法の二字で宇宙の萬法を究盡するのであります。
十三、他力念佛の一法究盡。昔しある人が戯れに申しまするに、天下に歌の數も多くあります、如何なる歌でも下の句は一つで間に合ふ、開

は
とよみし歌も昔しなりけり

といふのであると申しました。なる程其通りで

千早振神代もきかず龍田

とよみし歌も昔しなりけり

足曳の山鳥の尾のしだり尾の

とよみし歌も昔しなりけり

我庵は都のたつみ鹿ぞすむ

とよみし歌も昔しなりけり

といふやうに致しますれば一つの下の句で天下の歌を究盡することがで

きます。時に山崎宗鑑の申しまするには、「とよみし歌も昔しなりけり」は如何にも調法なる下の句で何の歌にも間に合ふが、それは唯歌のみのことで、外の事には用ゐられぬ。それより調法なるは

それにつけても金のほしさよ

といふ一句で御坐ると申しました。これは宗鑑の謂はれた通り、今の世には人間萬事に應用ができません。親が死んで葬式をせねばならぬ、それにつけても金のほしさよ。娘も嫁にやらねばならぬ、それにつけても金のほしさよ。持病が起つた、療治をせねばならぬ、それにつけても金のほしさよ。温泉にでもゆきたいものぢや、それにつけても金のほしさよ。伊勢參宮。上方見物、身の保養になつて宜しからう、それにつけても金のほしさよ。物見遊山どころぢやない、租税もろく／＼納めかねる、それにつけても金のほしさよ。政府でさへ金がないので博覽會も延期とやら、それにつけても金のほしさよといふやうな譯で、人間萬事、善いにつけ、惡いに

つけ、非出度につけ、悲しいにつけ、先きにたつものは金で御坐りますから、それにつけても金のほしさよといふ一句は萬般人事を究盡することができず。

却説以上の話しと同様に他力宗の念佛は萬般の人事に役に立つので御坐ります。故に念佛宗の人は行住坐臥念佛で、吉事にも凶事にも念佛を申し交する。念佛は至心に佛を念ずるので、至心とは至誠心であるから、吾が心の誠を明かにして佛に向ふに外ならぬ。故に念佛は吾々御互の妄想雑念を放棄して精神を明かにし本心の至誠を盡して佛に向ふのである。果して然れば禪宗の坐禪に於て一切の塵念を掃蕩して精神を鑑空衡平にし本心の誠徳を發揮すると同一に歸する。されば吉にも凶にも順にも逆にも、貧賤にも富貴にも、行住坐臥念佛の心を失はぬやう、換言すれば正念誠意を失はぬやうにするが念佛信者の心得である。此正念誠意の念佛を以て親に向へば孝となり、子に向へば慈となり、妻に向へば愛となり、夫に向へば貞となり。朋友に向へば信となり、國家に向へば愛國となり、人類に向へば博愛仁恵となる。即ち一個の念佛で百般の人事を究

盡するのであります。

十四、神道も念佛も其旨一なり。是を以て念佛の行者は念佛の一方に心を専注して、他の神佛を拜禮するには及びませぬ。何となれば念佛の心、即ち至誠の心の中には諸善萬徳が備はつてあるから念佛の一法に諸佛諸神を禮拜供養する善根は皆含まれてある。さるを愚俗の衰しさには、或は稻荷を拜して商賣の繁昌を祈り、或は不動を拜して災難の消滅を祈り、或は金比羅を拜して一身の幸福を祈り、或は薬師を拜して眼病の平癒を祈りなどして、信佛者敬神家と思つてゐる、これは非常の誤解で御て神佛に對して不敬至極である、這は薬師如來を眼薬と同視し、稻荷様を商家の手代と同視し、不動様や金比羅様を使役して火の番や、盜賊の番をさせたり、諸神諸佛を捕ひ來りて看護婦や、産婆の仕事までさせやうとするので、洵に不都合千萬なる人間の私欲と申すものであります。斯の如き私欲があつては至誠ではない、至誠でなければ念佛にはならぬ、要するに念佛といふも敬神といふも本心の誠徳を離れて存するものではない。古語に

一心以て百君に事ふべし、百心以て一君に事ふべからずとある如く、一片の誠心があれば百人の君に事へても忠を盡すことができる、されど私欲妄念があつて心が五十にも百にも分れる時は一人の君にも事へることができぬ。況や一片の誠心もなくして諸神諸佛を禮拜したからとて何の效もある筈はない。

加々美櫻鳩の近隣に桶屋の某といふがありまして神道を學び、桶屋の職を捨て常に淨衣を着け、烏帽子を戴き、御幣をとつて中臣の祓を唱へて得意としてゐましたが、或る日、櫻鳩に神道の事を問ひますると、櫻鳩が申すに、「夫れ神道とは人各々其職を守りて父母に孝に、主君に忠に、朋友に信に、正直潔齋にして祖先を祭る則ち是れ神道なり、何ぞ己の職を棄て巫祝の裝を爲し、巫祝の詞を唱へて後神道と稱せんや」と。某も是に於て大いに愧ぢて前行を改めたと申すことであります。

畢竟するに神道も誠を旨とし、念佛も誠を旨とするので歸する所は一でありませす。

十五、至誠と生死透脱。林逸齋の語に

人道は上を敬し下を愛す、唯是れ一誠のみ、事ふべからざるの君父なく、使ふべからざるの臣子なし

と申してある如く、吾々御互が本心の誠徳を存養するは人間道徳の大本で、此大本さへ立つたならば上に事ふべからざる君父なく、下に使ふべからざる臣子はない。且つや一片の誠心は能く吾々をして憂懼愁惱の苦みを免れしむる力がある。

加々美櫻鳩が其門弟の事に坐して江戸へ拘引せられたる時、少しも憂ふる色なくして行きましたが、江戸にて事實を辯駁して無罪にて故郷に歸りました。依て親族朋友の人々は皆酒肴を齎ち來つて祝ひました。櫻鳩はさして喜べる色も無かつた。酒闌にして一人前み出て申すに、「翁の江戸に拘引せらるゝや親族朋友皆憂ふ、而して翁憂色なし、其歸るや親族朋友皆悦ぶ、而して翁喜色なきは何ぞや」と。櫻鳩は之に應じて、『我は素より罪なし、何の憂懼かあらん、既に憂懼すべきなれば則ち何の喜悅かあらん』と申したさうであります。

又藤田東湖が常に申しまするには

蘇軾言へるあり、道義貫心肝、忠義填骨髓、直須笑談於死生之間、と
 余深く斯語に服す云々
 さすれば生死の苦惱を解脱するも亦此一片の誠心に由るので、天を怨み
 ず人を尤めざる大安心は本心の誠徳に由らねば得られぬのであります。
 十六、孝子慈母の至誠。これに就て想ひ起しました。昔し安永中、大和
 大路四條に菓子をおきなふ家の母、燈の病に伏す。其子甚だ孝にして
 常に看病を怠らず、醫癘に心を盡しけれど效驗なければ、大いに憂ひ
 て清水寺観音に請り、日毎に詣でしかど、これも亦しるしあらず。世
 俗傳へいふ、清水寺観音に祈りて效驗あらざれば、其舞臺といふ高き
 所より自ら身を投し、命を捨て祈るに、其願かなふものは其身恙なし、
 若し其願かなはざるは身碎けて死するなりと。彼の孝子、あまり詮術
 なくや思ひけん、母の命に代らんと決し、彼の舞臺より飛び下る。下
 は遙かに遠くして樹木枝を交へて生ひ繁る所なれば、恙なく落ち下ら
 んこと萬に一もあらしと見ゆるに、不思議に聊か毀傷なし。されど人
 事を知らずなりて倒れ伏す。そこにあり合ふ人々、驚き馳せ來り救ひ

助く。其中に此者を知れる人ありて、いとぎ菓子屋に馳せゆき斯くと
 告ぐ。母聞きもあへず大いに驚き悲しみ、思はず起ちて走り出で、家
 内の者共をせりたて、いとぎ清水寺に行きて我子を迎へ來れと氣をい
 らつ。家内も大いに周章し、追々人を馳せやり、とりまぎれて母の聲
 のたちしは更に心つかず、母も我子のことのみ愛へて餘念なし。直ち
 に彼子を助け還りしに氣も慥になり、歸るや否や母のことを尋ぬる聲
 に、母喜び走り出でしを見て、大いに驚き、いかに病は癒えたるやと
 いへるにぞ、母も初めて心づき、家内のものも、今之を知りて皆々驚
 き喜ぶ。其子の孝心深きにより観音の恵みを垂れ給ひ、斯く母は本復
 し、子も恙なかりけるなりとて、母は涙を流して感喜し、子の喜びは
 言ふもさらなりし。嗚呼、至孝感應の理、誣ゆべからず。
 と記してありますが、これには至誠通神明とでも申すべき所でありませ
 う。禪宗の立脚地より之を評しますれば孝子の至誠は能く其命を棄て身
 を全うせしめ、老母の至誠は能く其不治の病を療じたので、人間の精神
 に大なる力あるを示すに足るのであります。

十七、一貫の妙理。右様の次第でありますから、吾々は一片の至誠で萬事を貫くのが何より大切に御坐ります。宗教や道德のこのみでなく世間百般の事に處しても一事を以て萬事を貫くのが肝要である。

本阿彌光悦は非常に能書の人でありました。彼が字を習ひました故紙を見ると、同じ字を無數に書いてあると申すことでもあります。

這は同じ字を澤山に書く間に何時か書法を會得するので、徒らに多くの文字を書くよりは同じ一字を徹頭徹尾書くことが書法を學ぶに利益でありませう。商賣とても其通りで酒屋なら酒屋、呉服屋なら呉服屋、一業に就て商賣の術を會得すればそれにて一生涯充分であります。故に酒屋は酒を賣りて親の恩に報い、酒を賣りて妻子を養ひ、酒を賣りて他人と交際し、酒を賣りて公民の義務を果し、酒を賣りて租税を納め、酒を賣りて政府を維持し國家を強大にするの方便とする。一切萬事酒を賣るの一事で貫くのであります。農夫も其通り、農業を勵みさへすれば上は君父に事へ、下は妻子を養ふことができます。さるを農夫にして商賣氣を出し、商人にして一攫千金の競馬賭博などへ手を出すから破家散宅の難を

獲るのである。當時有名なる力士常陸山は角力の一業にて人に勝れたる爲め、相撲で妻子や門弟を養ひ、相撲で二頭馬車に乗り、相撲で洋行もし、相撲で米國大統領に謁見し、相撲で代議士の候補者に推されやうとまでした。

鳥光大納言光廣郷は和歌に秀てた御方でゆりました。或年春日神社の祭禮に勅使として御参向なさるべきの所、連日の雨で頗る御困却あらせられ、如何にもして雨を止めんと思召して詠ませ給ふた歌に

ふらばふれ三笠の山の雨なれば

さしては何のくるしかるべき

とて、降るなら勝手に降るがよ、三笠山の雨なれば、一向苦しうないぞと言はれました。すると雨の方でも痾癩にさわつたものか、はたと降り止んだと申してあります。

これと歌の一方に勝れた徳と申すもので御坐りませう。又昔しの俳人は大早のをり、

千早振神しろしめせ田植歌

の一句に雨を降らしたなど申し傳へてあります。

昔し江戸にて有名な三味線師がありまして品川宿に参つて、樓上にて三味を弾かうと致して、頻りに調子を整へやうとするに、如何なる次第かどうしても調子が思ふやうに整ひませぬ。そこで考ひましたには、道は容易ならぬことである必ず天候の變化があるに相違ないと、直ちに席を辭して急に江戸に歸りました。果せる哉、其夜は大海嘯がありまして品川宿には多くの死傷者を出しました。

三味線の一道を貫いてさへ斯様な奇特を現はすことも御坐ります。極めて卑陋な御話であるが、吾々が一本の横鼻禪を二箇月でも三箇月でも一貫して用ひますれば横鼻禪に一種の力が生じまして明日は雨が降るか、明後日は天氣がよいかなど氣象の變化を豫告して、中央氣象臺の向を張るやうになる。これ亦一法を貫くの致す所であると思はれます。横鼻禪さへ一法を貫く時は天地の氣象を知る、況や至誠を以て一貫する時は天地を動かし鬼神を感ぜしむるも亦當然と言はねばならぬ。至誠は實に徳行の基礎で御坐ります。

進徳の工夫(第四席)

一、儒者と禪僧の問答。上來第一席に於て人道の大本は萬物一體の大觀念にあることを辯じ、第二席に於ては人間の本性は絶對的に善なることを陳べ、第三席に於て徳行の基礎は人心の至誠にあることを説きました。が、未だ道徳を實踐する工夫を詳説致しませぬ、依てこれより進徳の工夫を論じて讀者諸君の參考に供へやうと思ふ。

或儒者が禪僧に向つて禪とは如何様なるものかと問ひましたら、禪僧は貴殿の頭の上にと答へた。そこで儒者は禪僧が譬喩的に禪を説くことを豫て聞き及んで居りましたから、大早計して、「拙者の頭の上にと在る者とな、解りました、屋根で御坐らう、屋根は家を蓋ふもの、即ち仁を以て天下を蓋ふのが禪ぢやと申さるゝか」。禪僧、「否、屋根では御坐らぬ。も少し上に在るものぢや」。儒者、「然らば屋上の鳥で御坐らう、鳥に反哺の孝ありと申す金言も御坐れば禪も亦孝の大道に外れは致すまい」。禪僧「否、否、もそつと上に眼を著けられ」。儒者「然

らば空中を飛ぶ處で御坐るか、莊子に爲あり腐鼠を食ふ、時に鳳凰ありて空中を翔翔す、爲其腐鼠を奪はれんことを恐れて嚇として鳴くところある、鳳凰は竹實に非ずんば食はずと申せば争でか腐鼠に心をかけ申さん、君子と小人の別も亦此爲と鳳凰との如くで御坐る、禪は爲の腐鼠を食ふが如き卑陋なる欲望を棄て鳳凰の空中を翔翔する如き清高の氣象を養ふにあるので御坐るか。禪僧「否、も少し上に眼を著けられん」。儒者「然らば天で御坐るか、天を知り命を知るは聖人の教の究極する所で、禪も亦これに外ならぬと申さるゝか」。禪僧「もそつと上の處に眼を著けられん」。儒者「天の上とありましては眼の著けやうも御坐らぬ、何卒手近い所を御示に預りたう御坐る」。禪僧「然らば貴殿の脚下（かた）に禪はあるから善く御覽なされ」。儒者「脚下（かた）ならば解りました、踏まるればふまるゝほどよき青疊、人に踏まるれば踏まるゝほど青海原の如き色を現はすが疊で御坐る、人も亦其通り他人の屈辱を受け、忍びますれば人格も次第に宜しくなる、浮世の艱苦と戦ふて屈せざる堅強の意志を養ふのが禪ぢやと仰せらるゝか」。禪僧「否、否、も少し

下に眼を著けられん」。儒者「然らば椽の下でも御坐るか、椽の下なら東西南北、開け放しで、八面玲瓏洒洒落々たる境涯に似て居ります、禪は此洒落の眞風を鼓吹するもので御坐るか」。禪僧「否、もそつと下に眼を著けられん」。儒者「然らば大地で御坐らう、地は萬物を載せて重しと爲さす、生々化育の效を全うするが地で御坐る、されば禪は生々主義を本とすると仰せらるゝか」。禪僧「否、否、もそつと下に眼を著けられん」。儒者「大地の下とあつては眼の著けやうも御坐らぬ、さてく禪とは六づかしいもので御坐る」。禪僧「貴殿は誠に悟りの悪い御方である、古語に天は高くして其頂を極むべからず、而して心は天の上に出づ、地は低くて其底を極むべからず、而して心は地の下に出づとある、九天の上、九地の下に達するは我心である、此妙不可思議なる心の本性を徹見して能く此心を治むるのが禪である」と申したさうであります。

二、治心の工夫に二あり。却説其心を治めると申すは即ち吾心に本来具
有せる妙徳を開發するので、これに自ら二種の工夫があります。一は向

内的工夫、他は向外的工夫と申して、前者は靜坐澄心、外馳の心を絶つて自心を省察致し、我執即ち私欲を除くので、後者は外界の事々物々に當つて本心の誠徳を發揮するのであります。故に向内的工夫は大死一番して悉く心中の賊を殺し、向外的工夫は大活現成して自己の光明を蓋天蓋地ならしむるをいふのである。王陽明の語で申せば向内的工夫は省察克治、向外的工夫は事上磨鍊で、一方は讀書究理、靜坐冥想等の方便を用ゐ、他方は活動上に於て精神を磨鍊するのであります。陽明が四十七歳の時に三洲の賊を討伐して兵馬倥傯の際に當りて人に與へたる書中に「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」と言うたのは此向内的工夫の容易ならざるを示したもので、又彼が四十八歳の時に寧王宸濠と稱する大賊と交戦中、門弟を集めて陣中にて學を講じつゝあつた時、偵察隊のものより我前軍利を失ふとの報告を得て一座皆色を失ふて面色土の如くであつたが、陽明は從容として少しも驚ける色なく、既にして再び偵察隊より我軍大いに勝つとの報があつた時、一座のもの皆一齊に起立して歡喜奮躍したにも拘はらず陽明は神色自若として喜べ、色がな

つた如きは彼が向外的工夫に熟したるを示して居ります。

三、知行の一致と向内的工夫。以上二種の工夫の中、何れが先き何れが後かといふと、向内的を先にし向外的を後にするやうに思はれますが、決して左様では御坐りませぬ、向内的工夫がなければ向外的工夫はできず、向外的工夫がなければ向内的工夫はできません。詳言せば吾々の内心に廻光返照して、心中の我執私欲を克治しなければ外に向て佛性の光明を發揚する譯にはゆかず、外に向て良智の光明を發揚せなければ心中の惡魔を對治することはできぬ。されば此二者は二にして不二、不二にして二なので別々に離して見ることもできず、さりとて混じて一とすることもできません。向内的工夫の中に大切なるは知行の一致といふことであります。併し茲にいふ所の知行とは普通世人のいふ所の知識と行爲とは同日の論でないので、一念の上には知行を論するのであります。王陽明の門人徐愛が「世人に孝を知りて孝を行はざる者あり悌を知りて悌を行はざる者あり見れば知行合一と謂ふべからず」と申しました時、陽明が答へて「好色を好み、惡臭を惡むが如き、好色を見るは知に屬し、

好色を好むは行に屬す、好色を見る時早く既に好み了る、故に知行合一である。また惡臭を聞くは知に屬し、惡臭を惡むは行に屬す、惡臭を聞く時早く既に惡み了る、故に知行は一致である」といはれました。果して然れば好色を見、惡臭を聞いて、これは好色なり、これは惡臭なりと知るも、これは愛すべしと思ひこれは厭ふべしと思ふも共に心念上の働きのであります。斯く一念上に知行を論じて其合一を求むるのは向内的工夫上極めて肝要で御坐ります。例せば吾々が他人の所有物に對して之を貪るの心が起つたならば這は其物を盗んだと同様の罪を犯したと心得て其執心を去らねばならぬ、又他人の妻に對して戀愛の心を起せば這は其人に姦淫を行うたのと同様なる道德上の罪人であると思はねばならぬ。道德上のことは必ずしも行爲に現はれて而して後に罪と爲るのではない、一念惡心を起せば直ちに惡を行うたのと同様に見らるゝのが大乘佛教の戒めであります。是の如く切實に内心を省察するのが向内的工夫と申すので御坐ります。

四、二宮尊徳翁學者と僧侶を緣ふ、二宮尊徳翁に成人が翁の嫌いなもの

は何かと問ひますると、翁は學者と坊主が一番嫌ひぢやと答へられたさうであります。何故學者と坊主を嫌はるゝかと問ひましたら、「他人より牡丹餅を貰ふて、己れが造つたやうな顔つきをして人に與へるものは私は嫌ひぢや」と翁は言はれたとのことで御坐ります。なる程學者と申すものは、やれカントが何と言ふた、レノーベンハウエルが何と言ふた、ソクラテスが何と言ふた、孔子が何と言ふた、老子が何と言ふた、ハルトマンが何と言ふた、ヴントが何と言ふた、乃至、ライスカレイが何と言ふた、ビスタキが何と言ふた、スハルトパールが何と言ふたなどと、古今の哲人が造つた甘い牡丹餅を貰ふて置いて己れが造つたやうな顔つきをして人に與へて恩をさせ月給をとつてゐるのであります。而して己れの考ひ出したことは少しもなく、己れが精神は依然として凡愚と同様なる境界を脱することができぬ、それも古今の哲人の説を其儘人に傳へればまだしも善いのであるが、途方もない誤解をして一盲衆盲を導くやうなことをする、これは恰も他人より貰ふた牡丹餅を喰ひちらし、腐敗させて人に與へると同様であります。また坊主は如何であるかといふに

釋尊は斯様仰せられた、龍樹大士は斯様教へられた、馬鳴菩薩はかう、提婆菩薩はどう、乃至、榮西禪師、法然上人、日蓮上人、道元禪師はかうと他人の牡丹餅を其儘に取次ぐのみで、自ら其味を嘗め果して其牡丹餅が今人の胃腸に適するか否か、また眞に滋養分に富めるや否やを試験もせずして人に與へる者が多い。是の如き人々は古人の教を一言一句の末に至る迄悉く暗んじて其儘に人に傳へるのを信仰と申して居ります、併し开は信仰ではなくて著音機であると思ふ。二宮翁は以上の如き學者や、坊主を嫌ふたのでありませう、況や坊主にして學者を兼ねたる者をや。

果して然れば吾々の修爲の工夫は著實に吾々の心上に手を下さなくてはならぬ、徒らに佛祖や聖賢の教を耳食するのみでは何の役にも立たぬ、唯口舌の上に古人の教へを弄するのみならば烏でも孝といひ、雀でも忠と鳴くではありませぬか。

五、向外的工夫と言行一致。次に向外的工夫に於ては言行の一致が最も大切であります。此言行一致は先きに説明致しましたる知行合一の行の

字を行爲の義にとつたので、知つたことは行はねば眞に知つたのでなく、行ふたとは知つて行つたのでなくては眞に行ふたのではないと申すのであります。換言せば事物を知つたとは行ふて後始めて言ふべきことではぬうちは無知と異なる所はない、また行ふといふは知つて行ふことで、無知にして冥行妄作するは眞の行ひではないとの意であります。例せば菓子を知るには實際に菓子を喰はねばならぬ、唐辛子の味を知るには實地に唐辛子を食はねばならぬ、また口に唐辛子や菓子を食ふても、唐辛子とも菓子とも知らずして食ふたのでは眞に菓子や唐辛子の味を知つたのではないと同様であります。されば聖人の道を學ぶも其如くで、孝を知り忠を知つたと言ふならば之を行ふた人でなければならぬ、孝を行ふたこともなくて孝道を説き、忠を行ふたこともなくて忠を知つて居るといふは僭越のことであります。今日倫理學者なる者の中に實際の道徳家がないのは此知行一致の工夫が缺けてあるからである。知行一致は即ち言行一致で吾々相互が道徳的向上の基礎であることを忘れてはなりません。

六、白隠門下の狂僧。此道徳的向上の基礎たる言行一致の工夫を忘れて徒らに高尚なる理論のみを喜ぶは青年の病で、深く戒むべきであると思ふ。

白隠禪師の門下に一人の狂僧がおりまして即身成佛の義を悟りそこねまして、吾は佛なりとの大我慢を起し、實地には何の得たる所もないのに、自ら佛なりと申して、勿體なくも佛經を以て其尻を拭ふて廁に棄てます。そこで同參のものが種々意見を以て止めさせんとしましたか頑として彼は之に應ぜず、「佛經を以て佛の尻を拭ふに何の差闕があるか」と理窟を申してゐました。依て此事を白隠禪師に申し上げると、早速禪師は右の狂僧を呼びつけ、其方は佛經を以て尻を拭ふとのことであるが左様かと尋ねますと、狂僧は如何にも左様で御坐る、拙僧は佛で御坐るから佛の尻を佛の經で拭ふに聊か差闕は御坐るまいといふ。禪師は、否、それは勿體ない、有難い佛様の尻を經文の故紙で拭ふては勿體ない、新しい白紙で拭ふが宜しからうと申されたさうであります。

徒らに高尚なる理論に馳せて脚下を顧みることを知らぬと此狂僧の如くなりますから御互に注意せねばなりません。

七、加藤清正の知行一致。加藤清正は知仁勇三徳兼備の大將と稱せられたいけありまして言行を等閑にせられなかつたものと見えて左の如く傳へられてあります。

清正公肥後の國に在城の時、夜陰の事にてありしに、雪隠へ行かれ、小姓共二三人付き添ひ行きて、手水所に待ち居る。清正公は、いつも廁へ入るに、不淨をにくみ、足の高さ一尺計の足駄をはきてはいられない。今宵は頻に足駄にてどん／＼と踏みならし給ふ故に、小姓の者共、驚きて戶外より窺ひ見るに、清正公の曰く、さればの事よ、今急に思ひ出したる事あり。庄林華人介を呼ぶべしといはれける故、庄林へ使をたてらるゝに、最早夜半過の事にてはあり、庄林も此程は、風邪にて平臥してありければ、とるものも取りあへず、亂髪にて登城しけるを、清正公は元來痔疾を煩ひて、長雪隠にてありしかば、いまだ雪隠より出てもやり給はぬ所へ、華人介參上仕れりと申す。清正公雪

隠の中より申されけるは、汝を呼び寄する事、別義にあらず、其方が家來、年のころ二十許の若者に、いつも茜の袖なしの單羽織を著たるあり、彼が名は何と申すかと尋ねられしかば、庄林答へて、出來助と申して、尾州の産にて候、生れつき沛芥の者にて、心もさがしく候故、草履取に申つけ候が、中々働あるものにて候と申す。其時清正公さればとよ、其事なり、いつぞや川尻に芝居能あり、見物に行きし時、其方も供に召し連れしが、彼草履取の出來助が、小便をするを見るに、肌にまんどうかたびらを著し、脚絆をはくべき處を臆當おそまをしたり。今天下漸く治りて、皆人平服になり。兵具ぶぐの用意など、そこくなる事にてある中に。かれが心懸、下郎には珍しき者なりと思ひしまゝにて、要用にかまけ、打ち忘れぬたる所、唯今ふと此閑所にて思ひ出し、かれが事を思ひやれば、中々尺寸の間も捨て置くべき事にあらず。かれらに褒美してこそ、武門の本意なれと存じ詰めしより、熟と思ふに、人の死生、世の治亂、身の盛衰、天地の變は計りがたし、斯く思ひ居るうち、我死ぬるか、汝死ぬるか、彼死ぬるかならば、一人かけても、

その志無にならん事、残念千萬なりと思ふより、深更ながら、時、人を待たぬ理、延引すべきにあらざる故、呼び寄せたる事なり。早々歸りて出來助に申し聞かせ、早速にとりたて遣すべし、しかし傍輩のそねみもあるなれば、高知は無用たるべし。其方家内の者も、嘸氣遣すべき間、早々歸るべし、乍去、風邪と見ゆる間、酒を吞むべしとて、麥のひしほを肴として、酒をのませらる。庄林涙にむせびかへり、とかうの返答もそこゝにて、ありがたさ肝に銘じ、殿にも先づ御休み候へと申しければ、清正公は帳臺へ入り給ひぬ。其跡にて庄林近習の小姓等に、御前には長雪隠を遊ばされたるまゝ、御風を召さぬやうに皆々心をつけて給はり候へと云ひ捨て宅に歸り、出來助を呼び出し、段々清正公の懇志の事ども申し聞かせしうへ、六十石に取り立て、近習に申し付けしかば、出來助もありがたき事、骨髓に徹し、是より彌と忠勤を勵み、度々比類なき高名を願はしけるとぞ。

されば加藤清正の如きは便所の中にて思ひついた事でも直ちに實行する人であつたので御坐ります。

八、知行は男女の如し。知と行とは譬へば男女の如き関係であらうと思ふ。男子の多くは智的のもので、女子の多くは情的のものであります。智は吾々を指揮する力があり、情は吾々を動かして行はしむる力があります。故に知行の一致は一家の父母が一致和合すると同じである。抑も男と女とは人類繁殖の爲に分業の必要上別れたに外ならぬので、人類も其祖先に溯り、更に祖先の祖先に溯り、下等動物と共同の祖先まで溯つたなら、分裂生殖で、一個體が分裂して次第に其数を増す所の生殖法に依つたに相違ないのであります。けれども彼等が次第に向上して高等動物となるに及んでは、男女の分業によりて生殖するやうになつた。されば一個體が二つに別れて男女となつたのでありますから、男子の性質にして女子に全く無いのがあり、女子の性質にして男子には全く無いのがある。即ち男子の長所は女子の短所、女子の長所は男子の短所となつてゐる。是を以て男女合して始めて完全なる一個人となるのでありますから、吾々が男子も女子も獨立の一個人ぢやと思ふは誤りで、實は半個人に過ぎぬので御坐ります。

かく此半個人なる男女二人が和合して始めて完全なる一個人となるのでありますから、一夫一婦が天の定めたる夫妻の關係で吾々の守らねばならぬ法則であります、さるを一夫にして二婦を持つから一個半となりまして家庭が纏りませぬ。家庭のとは一個とか二個とか三個とか纏らねば必ず波瀾が起る、故に一夫一婦の天則を格守して夫婦の和合を以て家庭の基礎とせねばならぬ。然れば夫婦の和合は家庭の基礎であるが如く、知行の一致、言行の一致は人格の基礎で、これがなくては進徳の工夫はできません。故に家庭の圓滿を計らんと欲せば必ず先づ夫婦の和合を本とせなくてはならぬ如く、人格の完成を期せんと欲せば必ず先づ言行一致を本とせねばならぬのであります。

九、何を知ら何を行ふか。然らば吾々は何を知りて之を言ひ、何を知りて之を行ふべきかと申せば、人心の本來清淨にして、佛祖と異らざる誠徳を具へたることを知り、其清淨無垢なる誠徳のまゝに之を行ふが知行の合一であります。人は如何なる悪人暴漢も皆其子を受せざる者はない、而して其子を受するの情は決して偽り飾りではない、本心の誠徳であり

ます。此本心の誠徳を吾子のみでなく天下の人に推し及ばせば其儘聖賢であります。且つや天地が此誠徳の現はれであることは前席に御話し申した通りである。此天地の誠徳と吾々の心の誠徳と合しますから、天地に對して言ふべからざる感謝の念も起り、天を怨みず人を尤めざる安心も得らるゝので御坐ります。さるを凡愚なる吾々の哀しさには本心の誠徳を蔽ふて背徳の行ひを爲し。以て憂悶に陥るのであります。

井上圓了氏が始めて洋行する時、送別會の席上で原坦山和尚が參集の人々に向て言はるゝには「此頃本心を失ふたやつがあるさうだ」。時に鳥尾得庵居士が「それなら誰か其本心を拾ふたものがある筈だ」と一拶を入れた。坦山和尚「それはおれが拾ふたのさ」と言はれると得庵居士はすかさず「それなら落し主に還したら宜しからう」と切り込んだ。「けれども未だ警察へ届けぬから、屈濟の上で還すつもりぢや」と坦山和尚は言はれたさうであります。

思ふに坦山和尚の言はるる如く吾々は多くは本心を失ふて迷ひに迷ひを重ねてゐるのでありますから一日も早く本心清淨の誠徳に立歸らねばな

りませぬ。

十、賭博師が良心の非難。吾人にして本心を味まさず天地の公道に合する心操があつたならば威武も屈する能はず、三軍も其勇を奪ふ能はざる大丈夫の漢となることができず、之に反して本心を味まして少しにても疚しい所がありましては一日も安心することはできませぬ。

ある里の古賭博師、名をば虎といふ、子分なども多くもたりけらし。其里の庄屋、賢きたばかりあるものにて、世にむべしく思はれ、おほいひと公人だちも、さる輩の中には頼母しきものに思ひ、何くれの仰事などあるを、うけ給はれば、やがて道理のまゝに糺しなど、いとかひがひしくて、其里、わたりの里くまでも、勢あるものなりけり。ある日、虎、庄屋が許に往きて消息せしに、庄屋出あひて、いかにぞ虎、おのれいみじう肥満したりな。しか肥満して身のためよからめや、用意せよ、あなゆゝしといふに、虎、顔の色青くなりて、かしてまうたるやうにて出ぬ。さて家に歸りて、心の鬼いと恐しければ、子分どもをよび集めて、けふ庄屋殿様にまうでつるに、かうくなんの給ひつ

れば、やすき心地もせず。そもく肥満とはなでふ事にかと云ふ。子分ども、己等も知り侍らず、されど身の爲め悪かる事との給はんには、ゆゑしき大事なり、明日ばかりには、からめられさせ給はんこそ、争で隠し奉らんと云ふもあり。常もかなしうし給ふが、かゝる大事に先づ驚かし給ふ、嬉しき庄屋殿様の御志かなと、口くいにひいて、死ぬばかり恐しと思ひたり。大かた親分の不當におはすなり、賭博などはさる事にて、我等にも忍びて、ひまをさへしつることの餘り怪しからずなど責められて、あなかま給へ、近き程は悪事にも用意を加ふるほどに、ひまんとやらん聞き知らぬわざなど争でかし侍らん、そもくひまんとは何事にかあらん。いかで物知人にあひて閑定てしがなと打なげきつゝ、覺束なう思ひたり。それきつて何にかはし給ふ、何さにてても罪は罪なり、身の爲め悪しかる事ぞ、用意せよとありつる御詞にて、はやう事は定めぬと云ひてうけひかず、それも實に理にて、たいわびしきは虎が身の上なり。さるにても肥満とはひはき人、かどはかしなどの事にやあらん、若き頃はそれもしたりしこともあれど、

今はいかてか、唯賽なげ筒とるより外のわざは何事もし侍らずといふに、ひまなし給はざらん庄屋殿様の痛う肥満せしな、ゆゑしきことなりとは争でかの給はん。さても身の置き處なきまで肥満するやうやはある、淺ましうなど言へば、天道神明おはします、ひまなしならば斯くいふ舌もくされぬべし、猶の給ふよ、心の限りひまなしながら、ひまなしせずなど我等を欺きてと、凡て口わかすべうもあらず。さるにても斯くておはしますさば、からめられ給ひて、いとからかりなん、まづ二ヶ月ばかりは、隣國にしのびておはせ、世上のけしきとりて、やがて告申さんとて。出し立てやる。月こえても何事あるべしとも見えず。子分らいと心得ず思ひて、其中に物よく言ふ男、庄屋が許に行きて、物け給はる、茲におはしますかといふ。何事ぞと問へば、さいつ頃、虎は御勘當にて今は家に侍らず、母など年老いて慨くが理に心苦しう、朝夕の烟も心細うのみなりゆくに、いと憐れに思給へられ侍りと言ひて、洵にわびしげなり。庄屋、げに此頃は虎が來らざりつるぞ、心もつかで訪ひもせざりき、さばかりかうとつる事も無かりし

に、争でさは云ふらん、肥滿しつるが、くせ事と仰事侍りつとうけ給り侍るといふに、おかしくて、おこのやつかな、肥滿とはふとり過ぎたる事よ、大酒のむけにや、あまりに肥えて、いみじげに見えしかば、中風などの起らんがゆゑしさに、湯薬をも服せよと思ひて、用意せよとは云ひつるはとて笑ふに、おちゐて、さては事なかりけりとして、嬉しかりけりとぞ

以上は一場の笑談に過ぎませぬけれども良心の非難ある者は風聲鶴唳にも心を痛めて到底安心のできぬことを示すに足ると思ひます。

十一、誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり。誠は天の道なりと申して天を對手とする仕事には偽ることはできませぬ、田を耕すも、木を植うるも、偽りでは成功する譯にはゆかぬ、従つて天の生じたる材木を以て家を造るにも、箱を造るにも、石を以て橋を架けるにも、塔を建るにも、偽りでは成就せぬ、されば人間の事も誠心でなければ何事も成功することはできませぬ。されば吾々は天の萬物を生じて少しも其功に居らず、其報酬を受けざる、獻身的の妙味を感得して、萬事に當るのが肝

要で御坐ります。かくする時は宇宙に對しては感謝の情が油然而として湧き出で、人間に對しては親愛の情が自然に起つてくる。これが誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なりと申す語の意味であらうと思ひます。

吾々の宗教的生活は之を實行するより外にはない、古への宗教の如く靈魂が死後に存続して天國や地極へ行くの、又は病氣や火難盜難のないやう神佛に祈るやうな事ではないのであります。元來吾々は皆天人でありまして天體の中に住んでゐるのである、何となれば地球は一個の惑星である以上は我太陽系中の一天體で、地球外より遠く眺めましたなら、月や、木星や、火星などの如く、晃々として輝いてゐるに相違ない、吾々は其明晃々たる天體に住するもの、即ち天人であります。故に天國や極樂を他方に求むるには及びませぬ。天道も人道も、天國も人國も一つである、老子が

天は一を得て以て清く、地は一を得て以て寧く、神は一を得て以て靈に、萬物は一を得て以て生じ、侯王は一を得て以て天下の貞たり、其

之を致すは一なり

と申したのは此意ではありますまいか。

十二、遠くは諸を物にとり近くは諸を身にとる。易に

古へ伏羲氏の天下に王たるや、仰では則ち象を天に觀、俯しては則ち法を地に觀、鳥獸の文と地の宜しきとを觀、遠くは諸を物に取り、近くは諸を身に取り、是に於て始めて八卦を作る。

とあります、遠くはこれを物にとり、近くはこれを身にとるのが進徳の工夫で御坐ります。詳言せば仰いで天象を觀ましても、俯して地理を觀ましても、物理を考へましても、一として吾々の本心清淨の徳を示現せぬものはない、二宮尊徳翁が

聲もなく臭もなく常に天地は

書かざる經をくりかへしつゝ

と歌はれたのはこゝであります。又退いて我身を省みれば何人にも我子を受するが如く偽りなき誠がある、故に近く之を我心に取りて法とすることもできる。同じ二宮翁が

己が子を恵む心を法とせば

學ばずとも道に至らん

と詠ぜられたのはこゝで御坐ります。

十三、道德は教ふべからず。元來宗教心も道德心も人間に固有なるもので、外より與へらるべきもので御坐りませぬ。ソクラテスが

道德は教へらるべきものにあらず

と申したのは千古の格言で、道德は注入的に教へたとて行はるべきものでない、本心に具へたる誠徳を助長して之を流行せしむるのが道德教授であります。これに就て一つの御話がある、井は實業家として輝々たる

鈴木藤三郎君の話で、直接に本人の言はれた言に

私も豫定通り五ヶ年の計畫を終りましたから、今後は菓子屋をやる必要も無からうと思ひまして、愈々砂糖屋を始めたのであります。砂糖屋と考へつきまじしたる次第は、今迄の商賣と關係がある爲に多少之に關する經驗もあります上に、以前茶業で横濱へ往來します頃、たしか貿易新聞かに其頃の日本の精製糖輸入高が一ヶ年四百萬圓餘とあるを

見て、我々が骨折で外國へ出す茶も、やつと四百五十萬圓である砂糖と引換に過ぎない、今後文明が進めば無論砂糖の消費高も増すわけである。之を内國で製造する事になれば、國家社會に對しても、何分の貢獻であると思ひまして、そこで之を終生の事業としやうと決心したのであります。併し愈々事業に着手するとしても、先づ資本を調達せねばならぬが、それよりも第一如何にして製造するか、まだ一向方角も分りませぬ。そこで東京へ出でまゐりまして、遠州の人で猪原吉次郎と云ふ化學者が、其頃まだ工部大學校の學生で、牛込に下宿して居りましたのを訪ねて、砂糖製造の事を聞きました。猪原氏は色々西洋の本を讀んで聞かせてくれました、それから更に大學校の分析所に連れて行き、實地に就て一通りの説明をしてくれました。私の國で白下砂糖しろしたの製し方だけは知つて居りましたが、まだ精製の方法などは丸きり不案内でありましたから、何か西洋書の翻譯はないかと思つて、頻りに探して居るうち、ふと穴山有鄰堂で吉田五十穂と云ふ人の譯した、甜菜糖製法と云ふ日本綴八冊の圖入の書物を見つけました。

て、大悦びで國へ買つて歸り、それから殆んど一年間といふものは、此本が毀れてしまふ位、何度となく繰返して讀んだものであります。此本は固より甜菜から砂糖を作る方法を書いたものではありましたが、其末の方には砂糖製造に關する記事も多少ありますので、之に依て幾分か精糖の知識を得たのであります。此から毎年數回上京しては工部大學校へ行き、猪原氏に逢ふて色々不審を聞いて居りましたが、固よりまだ精糖の技術を手に入れたといふ譯ではなく、從て資本もできず、中々すぐに着手するといふ事ができません。そこで砂糖に縁ある氷砂糖の製造を思ひついたのであります。さて一體どうして氷砂糖の製造を思ひ立つたかと申せば、その頃は氷砂糖が支那の福州から輸入せられ、皆藥種店で賣つて居たもので、其價も白糖の二倍であります。しかも其品を見まするに、色赤く、笹のこみなどが交つてゐまして、我々の智識で判断しても、疑もなく彼地從來の土産であつて、機械的工業的の生産物では無い。それで價が此通り高直であるとするれば改良の餘地は充分にあると思ひまして、一つ

之を階段として進まうといふ考へで、其製法を研究し始めたのです。併し其實験の結果を見るのは中々容易の事ではなく、色々と工夫をいたしましたが、其爲に久しい間非常に心身を勞したのであります。その處が誠に不思議な機會から目的を達する端緒を得たのであります。それは明治十五年の十月、二宮先生の二十七回忌に、日光今市へ友人二三名と共に出掛けた時の事でありました。不便な時節でありましたから、往復に凡そ一ヶ月を費しました。今市では始めて二宮尊親氏に御目に掛り、其他奥州の人たちにも逢ひました。其歸り途でありました、宇都宮に一泊しました。其頃一新講の定宿をして居た稻屋と云ふ旅店に泊りました。處が其夜一寢入してから便所へまゐりましたと、遙かに離れられた座敷で二三人の客人が何か聲高に議論をしてゐる、書生さんといふ風でありました。其話の中に唯一言「砂糖の結晶」といふ語が耳にとまると、ハツト思つて椽側につゝ立た儘で、耳を立て居りましたと、其話は長う御坐います。要するに砂糖は純になれば自然に結晶するものだといふのであります。之を聞いて、はたと心に悟つたことがある、今

迄は砂糖は人の力で固めるものと思ひ、何か外部からくつ付る算段ばかりして居りましたが、天然に結晶體の定則があつて、純になれば自ら固まるべきものであつたのを、今迄は自然の理法を妨げてゐたのであつたと心附きました。一日も早く家に歸りたくなりました。東京に道連を殘し一人で遠州へ歸りました。早速此原則に基き、今迄附けやう／＼としてゐたのを、反對に取らうと考へて實驗にかゝりました。其果して程なく極小さな結晶を見ることができるとなりなりました。其時の嬉しさは中々御話することができません。私は此以前から倉の莚おろしの味噌部屋をかたづけまして、之を試験室に充て居りましたが、此中で例の試験をして見ました。また何か物足らぬ所があると見えて、うまく出来る事もあれば、又出来る事もある。發明したのは誠に嬉しいけれども、愈々營業者として立行くのには、是非百發百中で無ければならぬ。百發百中でないのは遺憾である、これでは人から資本を借りる事もできぬ。まだ／＼術を極めたいふには最後の微細な點まで推究せねばなりません。學者に聞きま

しても分らぬのは道理で、學者は自ら營業に手を下した人でありませぬ。之は何でも自分で實驗して、詳かに氷砂糖結晶の状況と變化とを知るに限ると思ひました。處が最も困難なるは温度及び空氣の關係であります、例へば春は善くできても、夏はいかぬ事があります。それには色々手をかへて其状況を細かに目撃したいと思ひまして、明治十六年の夏であります、例の味噌部屋の實驗室の中に、澤山の器へ砂糖の液を入れまして、自分も握飯持參で、二週間晝夜とも此中に立籠つたのであります。温度は火鉢を入れて百二十度から百四十五度の間を色々と變へて見ました、無論九裸であります、折々苦しくなると實驗室の小窓を開けて息をしませ、じつと見つめて居ますと、砂糖が始めて結晶する時は、電氣の作用であるか、ぱつと美しく光り、それから段々結晶するのであります、器の上の方から固まつて來るのもあれば、下から結晶し始めるのもある。器の大小、形、液の深さによつて違ひます、温度の高低にもよります、どうするのが最も好いかと云ふ事が、すつかり分りました。之を見てゐると睡むといふことが更に

ない、裸で握飯を焼き、梅干を添へて二週間食つてゐたのであります。さて實驗の結果略々氷砂糖の出來方が明瞭になりました、味噌部屋を出た晩は家に入て、ぐつぐつと寝たのであります。處が翌朝枕をつけた頭の半分がムズムズするので、よく見ればすつかり脹れ上つて膿を帯て居ります、化學者の猪原氏の兄さんの猪原醫師に見て貰ひますと、どうも何病であるか分りませぬ、翌晩は他の一方が又膿みました。醫者も手をつけることが出來ない、如露で頭から水をかけますと、白い膿が流れる。斯の如き體たらくで、十一月の下旬になつて、やつとよくなりしましたが、頭に髪の毛が一本もなくなりました。世間では色々に噂して、花柳病だらうなど、云つた者もあつたさうで御坐います。あとで考へて見ましたら、全く汗疹が一面に出來たのを打捨て置いたのであります。

此病氣が全治しましたから、私は又更に前の實驗にとりかゝりました、流石に養父なども驚きまして、あれでも懲りずに、まだやるのかと申したことであります。さて實驗も段々成績を挙げました爲、福川氏と

申す人から三千圓の資本を借りまして、大當の事業に着手致し、それから今日まで、砂糖製造業者として世の中を渡つて来たのであります。

却説以上の物語は一個の精士が勤勉力行の結果、成功したる實例で少なからず吾々を感奮せしむる力がある、且つ氷砂糖を作るに方りまして外より力を加へて成功しなかつたのが、砂糖自身に結晶する力あることに着眼して遂に成功したる點は言ふべからざる趣味があると思ひます。吾禪宗の教へもこれと同じく道徳を外都より注入するのではなく、人間は本來清淨の心性を備へて居るから、其清淨なる誠徳を抽き出して完全なる人格を作らうといふのであります。

十四、二宮尊徳翁と仁藤仁齋先生。二宮尊徳翁が服部家の興復を計りました時に種々なる經濟法をたてました中に下女から鍋炭を買ひ上げることを致したさうで御坐ります。そこで下女は鍋炭を翁に買らうと思つて毎朝奇麗に鍋釜の炭をかき落しますから、薪が少くとも炊焼ができて一年には非常に薪の代が減りました、又一方には下女も小遣錢が貰へるの

で喜びましたから、一舉兩得であつたと申します。尊徳翁はまた勝手元の窓は白紙で奇麗に貼りまして明るく致し掃除を嚴重にさせましたが客間や表座敷の障子は故紙で貼つても宜しいと申しました。成程表座敷や客間は誰も氣をつけて掃除するから、故紙障子でもよいが、勝手元が暗くては不潔になり勝で、故紙貼では宜しくないのでありませう。

此事は二宮翁のやり方が全く世人と反對である、思ふに或程度までは世人と反對の事をするのが宜しいのであります。例せば世人が御祭騒ぎをして外に出て居る間に吾々は退いて沈思默想し、世人が政治に狂奔する間に吾々は實業に勉め、世人が一攫千金の僥倖を望む時に吾々は勤勉力行に心かけ、世人が自動車で走り廻る時に吾々は徒歩主義を實行し、世人が自然主義を唱ふる時に吾々は非自然主義を唱へ、世人が女役者になる時に吾々は下女奉公の稽古をし、世人が酒を飲む時に吾々は茶を呑んで靜かに其日を送るやうにしたならば却て人間らしい行ひが出来るであらうと思ひます。

之を要するに進徳の工夫は知行合一、言行一致を以て最も肝要と致すの

で御坐ります。

昔し伊藤仁齋先生は京都堀河に居られまして古學と徳行とを以て名を得た御方であります。されば日本國中より多くの人に来て其門に學んだものであります。而して多くの門弟の中には不行跡の人もあると見えまして、一人の書生は絶えず種々の口實を設けて花柳の巷に遊ばに行きます。今日は隣家に婚禮があるから晩方より御暇を戴きたいと、又明日は伯父が齒が痛むと申しますから、御暇を下されとか、明後日は伯母の家に産がありさうですから御暇を下されといふやうに色々の口實を設けて夕方より外出する、併し仁齋先生は正直一途の人で少しも之を疑はずして快く暇をやらせました。然るに書生も口實とする事件が盡きたものと見えて『今日は母が大病故、夕方より御暇を戴きたら御坐ります』と申上げると、先生は之を眞に受けまして、それは大變ぢや早速行つて見るやうにとて暇を下された。そこで書生は甘く先生を欺いたと思ひ、蔭で舌を出して其儘、例の遊處へ参りまして十二分に酒に酔ひ、踊りとして夜半過ぎに、鼻歌まじりに立歸ります。

た。すると玄關の間に燈火が見えるので、他の書生が勉強しつゝあると思ひまして、荒々しく戸を開けると、書生ではなくて先生が儼然と座を構へ、燈火を側に置いて待て居られました。酔ふた書生之を見るや、平蜘蛛の如くに叩頭して、大いに度を失ひ『へー今日は天氣快晴、否、御機嫌宜しく、誠に雨天で困り入ります。』など面喰つて取り留めもないことをいふと、仁齋先生は徐ろに口を開かれ『よく御歸りになりました、尊公の母上が大病と承りました故、拙者も大いに心痛致し、尊公の出て行かれたあとで、如何であらうか、如何であらうかと案じ煩ひまして、心も心ならず、且つは又尊公の歸塾も遅くなりましたから、病が一層重うなつたではあるまいかと、種々心配致して臥ても居られぬこと故、尊公の御歸を待て居りました。母上の様子は如何で御坐る』と懇切の情が面に現はれて申されました。書生は「ハイ、は……母の病氣……は……よ……宜しくなりましたから御安心を……」とは申しましたが、全身に冷汗を流し、消えうせたき心地が致し、それよりは心を改めて勉強したといふことであります。

此仁齋先生の如きは實に聖人の道を知て聖人の道を行ふ人で、眞の學者と申す者で御坐りませう。
(完)

明治四十二年二月廿一日印刷
明治四十二年二月廿五日發行

清新話典附
定價金四拾錢

著 者 忽 滑 谷 快 天

發 行 者 山 中 精 二
東京市京橋區築地二丁目番地

同 柳 原 喜 兵 衛
大阪市東區北久太郎町四丁目

印 刷 者 手 塚 猛 昌
東京市京橋區館屋町十五番地

發 行 所 山 中 井 泷 堂
東京市京橋區築地二丁目番地

開西發行所 積 文 社
大阪市東區北久太郎町四丁目



醉庵 鈴木券太郎先生著

○犯罪論及女性犯人

●菊判全一冊 クロース美本 定價全壹圓五拾錢
●紙數五百五十ページ 餘 郵 稅 金 八 錢

犯罪とは何物か犯人とは何者か女性とは何者か女性犯人とは何物か本書は此等問題に答へんが爲めに犯罪生理學、犯罪心理學、犯罪社會學の見地に犯人定義に一大動搖を與へ女性犯人に就ては其解剖的及生理的特狀を詳説し其人相、毛髮、乳房、生殖器、音聲、筆跡、感覺、色慾、文身の如き亦之を遺傳の法に商量し或は模型の理に依證し先天犯者熱情犯者其他の分類下に於ては各其特質を列舉し我國最近の犯罪事件を具體的に參考し以て理實配合の巧を究て造化の微を開き人情の細に入り女性秘密を曝露し其罪惡を検案する處觀察犀利思索超凡洵に之れ科學の精華文學の上乗なり而して考證は則廣く百家に出入し論斷は則浮薄を避け一言一句悉く根底あり、犯罪學の一大體統、新刑法學派の一大柱礎、理論深遠風神崇高の一大文章此書を指して現世紀の一大產物、思想界の一大革命と云はずんば將た何物をか指さん實に破天荒の奇書也。

○日本文法の解説及練習

前東京高等師範學校教授小山左文二先生著
全一冊 三百八十頁餘
定價金六拾錢 郵稅金八錢

大學豫科、男女兩高等師範學校、各種高等專門學校入學受験者、并に文部省教員檢定受験者參考書として、中學校、師範學校、高等女學校の學生及び小學校教員檢定受験者の參考書として、著者苦心の作に係る、解説周到にして明快、載するところの練習問題實に一千五百餘、添ふるに明治三十年以降本年までの各種高等學校入學試験文法及び明治十八年以降本年までの文部省教員檢定試験文法問題の全部を以てし、一々適切にこれを解説指導せり。

文學博士 三宅雄二郎先生著

○小泡十種

全一冊 定價金四拾五錢
郵稅金 六 錢

流れては浩渺盡きざる大河となり、散じては繽紛限りなき飛沫となる、小泡か激濤か蓋し近代稀有の快著なり。

久米邦武先生著

○上宮太子實錄

全一冊 洋裝美本

定價金七拾五錢 郵稅金八錢
本書は高眼達識を以て史界獨歩の稱ある前大學教授久米邦武先生が該博なる考證と奇拔なる見解とを以て、日本文明の開拓者たる聖德太子の實傳を詳敘し、荒唐不稽なる從來の傳説を擊破し、前人未發新見地を以て其眞面目を發揮し、太子を中心として政治、宗教、文學、美術の各方面に亙りて日本文明の淵源を尋ね其特色を説きて剩す所なく。論は東西に及び、議は今古を悉くす、眞にこれ多く得べからざるの珍書たり。興國の氣運今や熟して人は皆な我が文明の眞相を知らむことを思ふ本書の出る豈に偶然ならむや。

文學博士 松本文三郎先生著

○宗教と哲學

全一冊

定價金四十五錢 郵稅金八錢
本書全篇十有餘章まづ筆を宗教と哲學との根本問題に起し宗教道徳研究と信仰等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據にある事を闡明す蓋し病弱なる現代思想界は此等に因りて始めて元氣の回復を求め得るなり。

新公論社編 ○附錄學生消夏法

○男女學生氣質

全一冊 定價金貳拾錢 郵稅金貳錢

該書は坪内雄藏、棚橋絢子、幸田露伴、村上精三、輪田眞佐子、佐治實然、山脇ふさ子、與村五百子、山縣三郎、前田慧雲、井上圓了、小杉天、村介石、磯谷彌一郎、戸川殘花、鈴木券太郎、石黒忠恵、渡塚麗水、中川謙次郎、南岩倉具威、橋一郎、寺田勇吉、ノオスタ、坂本盛徳、加久宜、古川流泉、田中治六、加藤咄堂、境野、中島徳藏、下田次郎の大家が、現代男女學生の長短兩方面を觀察し、その長所を助け、その短所を補ふべき方法を示されたるものなり。

獨逸哲學者 ボール、ケーラヌ先生著
鈴木券太郎、大拙居士 譯

○阿彌陀佛

全一冊 定價金參拾五錢
郵稅金 四 錢

阿彌陀佛とは何ぞやは是れ佛敎の根本問題也ケラヌ博士の彩筆を揮ひ始り小説的結構を以て通俗にこれを解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評噴々たることを弊堂頃者十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙居士を煩はして此和譯を得たり豈佛の有無に惑ひ心の不安に悶ふる人のみこれを讀むべしと言はむや。

文學博士 南條文雄師著

○感想錄 全一冊 定價金四拾錢 郵税金六錢

本書は博士平生の感想なるものにして或は古人の訓誡を示して後進を誘掖し或は博士自身の感話あり偉人逸話あり時に信託を加ふるに修養の良時を以てす實に之を精神修養の好指針品性陶冶の良資料たり

文學博士 南條文雄師著

○忘己錄 全一冊 定價金四拾錢 郵税金六錢

佛教の信仰は己れを忘れ佛陀の大慈悲に歸命するにあり本書は博士多年の靈的實驗に徴して他力宗教の真髓を説述したる者なり行文平易にして所説懇篤面たり博士の馨咳に接する思ひあり一讀よく煩悶憂鬱を慰む

文學博士 南條文雄師著

○人道 全一冊 定價金拾五錢 郵税金四錢

人の道とは如何なるものぞ本書は博士が儒教の骨髄たる仁義五常の道より宗教の極致たる經典の所説とを對照し叮嚀懇切に人道の主旨を示されたるものにして博引旁證加ふるに適切な譬喩を以てし談話體に何人にも解し易く説かれたるものなれば布教師の參考たり修養の資たる傳道的好施本たり

文學博士 前田慧雲師著

○修養と研究 全一冊 定價金五拾錢 郵税金八錢

博覽高識教鞭を帝國大學に執りて幽を閑き微を穿ち温厚篤實感化を東都の青年に垂れて一世の模範となれるは前田先生なり本書は先生が多年の研究になれる佛教教理上の大論文と修養に關する深厚なる談話とを編輯したるものなれば一度本書を繙かんか親しく先生に接して指導を受くるの感あるべし

文學博士 前田慧雲師著

○禪榻茶話 全一冊 定價金五拾錢 郵税金六錢

短篇長語五十餘篇修養の要諦を説き信仰の妙味を談じ學藝の精髓を提げ古今の人物を評し個々の話頭深厚の教訓と無限の興趣を感ぜしむ

アーサー、ロイド先生序 曹洞宗大學講師 忽泔谷快天師著

○怪傑マホメツト 全一冊 定價金五拾錢 郵税金八錢 挿畫

序論にはアラビヤの奇風異俗抱腹絶倒すべき者時趣津々たる者枚擧に遑わらず本論には宗教家として、マホメツトが迫害凌辱の中に穩忍黙耐する預言者の高風を敍し更に將軍として渠が千里の馬に跨り屍山血海を踏破する雄姿を描き進んで渠が政治家としての怪腕鬼術を述べ最後に渠が個人として起居動靜の瑣より閨門の秘事に至る迄悉く詳記して裸々赤條々たる眞面目を現はす我國空前の大著なり

曹洞宗管長 森田悟由禪師序 加藤咄堂、峰玄光兩先生共著

○禪觀錄 全一冊 定價金參拾錢 郵税金四錢

禪とは何ぞや曰く言ひ難し本書は言ひ難きの禪を説き盡し餘蘊なく更に發して武士道の根底となり凝つて文學技藝の精華となれる事蹟を描寫し逸話あり漫筆あり神韻縹緲一讀卷を擱く能はざらしむ

文學博士 前田慧雲師著

○蓮如上人 全一冊 定價金參拾八錢 郵税金六錢

佛教界に、最も多くの特色異彩を放ちつゝある、純他力教眞宗の大成者なる蓮如上人に就て、前田博士が、該博の學識と、燃犀の史眼とを以て、上人の時代、性格、教義、信仰、事業、感化等のあらゆる方面に涉り、微に入り、細を穿ちて、評傳せられたるものにして、上人の眞面目は歴々として讀者の眼前に活躍し、純他力教の眞髓は、一讀の上に了解せらるべし

文學博士 南條文雄師著

○修養錄 全一冊 定價金四拾錢 郵税金六錢

温厚篤實、而も道心堅固の聞えある、南條博士の實驗的修養を詳細に記載したる者は本書なり。章を分つこと六、節を分つこと二十、著者得意の趣味ある談柄は細大漏さず擧げて本書の中にあり。人生問題の解決に悩める者、若くは樂しき生活を送らんと欲する者は速に來て本書を讀み給へ。本書は蓋し煩悶者の慰藉劑なり、求道者の好資料なり

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著

定價金四拾錢 郵税金六錢

○**禪學講話** 全一冊
適切簡明以て精神の修養に資する者は禪也。古往今來、偉人哲士の眞骨頭を鍛錬したるものは禪也。痛言快語以て人生の眞意義を示し、處世の妙諦を説く者は禪也。本書『人生の謎』以下各章、明快の説、有趣の筆、禪の眞髓を發揮して餘蘊なし。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著

定價金四拾錢 郵税金六錢

○**禪の妙味** 全一冊
上篇は精神澄淨の妙味を論じ苦學昇沈の中に處する實學の工夫を示し百年の煩悶を一掃すべく下篇は觀性の妙味を説き唯心觀あり萬有一體觀死生透脱觀に及び千古の惑を破るべく眞に禪學者の良師たり。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著

定價金五拾錢 郵税金八錢

○**批判禪學新論** 全一冊
本書に收むる所唯心論現象即實在論物心合一論萬有一體論安心立命論の五章は禪學の根底を論明し餘蘊なく以て禪學史上一新时期を劃するに足る最後に禪語略解を附し初學の參禪に便す。

建仁寺管長 武田默雷禪師著

定價金五拾錢 郵税金六錢

○**默雷禪話** 全一冊
切實なる活説法あり時に無邪氣なる懷舊談あり一度本書を繙かんか禪師の馨咳彷彿として紙上に活躍せり若し夫れ禪師獨特の三十棒に至りては偽善と輕薄の現代學者を罵倒し盡し完膚無からしめ覺えず快哉を叫ばしむ。

建仁寺管長 武田默雷禪師著

定價金四拾五錢 郵税金六錢

○**續默雷禪話** 全一冊
本書は臨濟の師家武田默雷師の談話百則を收むる是れ平話俗談些の禪臭なき所却て捧喝あり教訓あり修養あり讀むもの此の間に自ら禪機を拈じ來らん。

原坦山禪師著 荒木磯天講述

○**禪學心性實驗錄** 全一冊
本録は禪門の奇傑故坦山老師が三十有餘年の實驗に基き迷悟の本體を腦脊の二髓に歸し惑病の同體を論じ腦脊の異性を道破したる者にて禪學及び生理學心理學上大革命を惹起すべき新學說なり老師が一代の功過は係りて此一書にあり。

黑岩周六先生 講演 丙午出版社編

○**人生問題** 全一冊 定價金五拾五錢 郵税金八錢

人生とは何ぞや、是れ千古の疑問なり、哲人之を説き、碩學之を論じて、而して懷疑の雲益密に、苦悶の人愈々多からんとす、然るに現代思想界の泰斗、黑岩先生、自ら人生問題に逢着して、疑問の源泉を探り、大に其眞趣を得て、茲に此書あり、彼る所、神の有無に始まり、人生の悲觀樂觀に終る、眞に天籟の妙音なり、世の悶ある人、疑ある人、速に來つて此福音に接せよ、庶幾くは平穩と満足と活力とを得て、温く日光ある人生に觸着することを得ん。

加藤咄堂先生著

○**通俗心經講話** 全一冊 定價金參拾錢 郵税金四錢

佛敎八萬四千の法門を收めて二百六十二字に單み、宇宙の神秘天地の妙用説て到らざるなく、人心の、源底信仰の要義示して盡さざるなし、著者平易の文を以て之を講述す、眞にこれ修養の好資學佛の南針たり。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著

○**線心參禪道話** 全一冊 定價金四拾錢 郵税金六錢

本書は禪理を經とし道義を緯とし古今の説話を交錯したる禪學道話にして或は滑稽飄逸抱腹絶倒すべき者或は悲痛哀怨萬斛の涙を流すべき者或は勇壯快活肉動き骨鳴るの慨ある者或は謹嚴方正古聖先賢と伍を同うして立つの感ある者あり言語談笑の間自然に道に入らしむ禪學書中破天荒の大文字也。

大内青巒居士著

○**佛敎の根本思想** 全一冊 定價金五拾錢 郵税金六錢

浩瀚なる佛敎の根本思想を捕へ來りて縱横に解釋し雄辯滔々言辭平明宇宙人生に關する諸種の疑問を解釋して快刀亂麻を斷つる感あり森茫たる佛海此好指針を得て初めて渡るを得むか。

井 瀕 堂 發 行 書 目

文學博士 村上專精先生著

○自信錄

全一冊 定價金五拾錢 郵税金六錢

これ博士の著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の奥底を披露すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章二十七節説いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛教學者の見解は此書によつて窮ふべく敬虔なる佛教信者の態度は此書によつて知るを得べし。

東洋大學講師 釋清潭先生著

○寒山詩新釋

全一冊 定價金五拾錢 郵税金八錢

是れ佛か是れ仙か是れ狂漢か得て解すべからざるものは寒山詩なり是れ韻語か是れ詩語か此れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として抜けざることや著者清深雄大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目こゝに於てか露白す寒山詩神を知らむと欲するものは須らく此書を以て指南車と爲すべし。

ペークマン先生著 杉村縦横先生補

○改訂強肺術

全一冊 定價金四拾錢 郵税金四錢

肺病を恐るゝものは讀め、肺病に罹れるものは讀め、歐米に於ける最新式の民力養成法を讀め、此書に六の特色あり。

- 第一、時間を要せざること。
 - 第二、費用を要せざること。
 - 第三、場所を要せざること。
 - 第四、勞力を要せざること。
 - 第五、言文一致なること。
 - 第六、總ふり假名付なること。
- 故に男子は勿論、婦人小兒と雖も、容易に理解し容易に實行し而して確實に其功を收め得べし。

清水故黙爾先生遺稿

○紫風全集

全一冊 定價金貳圓 郵税金拾貳錢

清水君は教界の元勳島地默雷師の第二子にして其篤學能文既に世に定評あり往年大志を懷きて印度に留學し佛教梵典の研究に従ひ又大谷光瑞師が佛蹟大探險の壯舉に加はりて功蹟頗る大なる者ありしが不幸にして未だ大に所得を世に施くに至らずして異境に病歿す知友之れを哀しみ其生前述作せりとを處を集めて茲に之れを公に論文あり俳句あり漫録あり詩簡あり悉くこれ金玉の名文君が天才的詞藻の燦として輝けるを認め得べし。

楚人冠 杉村廣太郎先生著

○七花八裂

全一冊 定價金六拾錢 郵税金六錢

著者曰此書は著者が名に畏れず戀に泣かず半錢の債を負はず半個の籠に庇はれず天上天下一點半齋も他の聖財威壓を受くることなくして縦に我が見得底を披露せる者過去十三年間の悪文惡詩收めて此の一卷の中に在り著者の如く貧乏し著者の如く墮落せんとする者は請ふ此書を讀め。

文學博士 村上專精先生著

○誠のしるべ

全一冊 定價金四拾錢 郵税金六錢

誠に實に人生の基礎をなすものにして政治もこれに於てすべく實業もこれに於てすべく宗教も道徳も教育もまたこの根底の上に立たざるべからざるなり今や村上博士古今東西の事例を引いてその然る所以を詳説せらる荷も誠を體得して眞の人たらしむと欲するものは此書を讀め。

建仁寺管長 竹田猷雷禪師著

○禪機

全一冊 定價金四拾錢 郵税金四錢

活殺自在は禪の機鋒にして、與奪縦横は老師が手腕なり、兵家之れを用ひて其妙を盡し、商家之を用ひて其玄を究む、日常行中此禪機あつて初めて活社會に活運動を試みるべし、本書は諸方面に涉りて應用せらるべき禪機を示したるものにして何人をも問はず一讀二讀三讀すべき近來の活書なり。

文學博士 南條文雄師著

○靜思錄

全一冊 定價金四拾錢 郵税金六錢

靜かに思へば心理の奥底には信仰の念の進り出るを禁ずる能はず、本書は博士が信仰の餘蘊にして説話あり研究あり諄々説いて倦まず人をして敬虔の念を起さしむ修養の筈たり處世の訓たること此書の如きは尠なし請ふ一本を購ふて其真趣を味へ。

7-3139 冊

井 測 堂 發 行 書 目

東洋大學講師文學士
元第五高等學校教頭 渡邊又次郎先生著

○最新論理學

全紙數三百五十餘頁
一總價金壹圓貳拾錢
冊郵稅金八錢

本書は東洋大學中央大學第二高等學校第五高等學校等に於て十數年に涉りて論理學を擔當せられ本邦に於ける斯學泰斗として知られたる渡邊文學士の新著にして斯學の重要な事項は擧げて之を網羅し所論の明晰にして内容の整頓せること從來絶えて其比を見ざるのみならず他書の缺陷たる諸點に就きては特に十分なる研究を施したると同時に能ふべき限り簡潔にして而も平易なる敘述によりて斯學の大綱を示さんことを努め其間に於て到る處に學士の卓見を同ふことを得しめたるものは是れ實に本書の特色なり又欄外に重要な題目を掲げ卷末に英語を對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし苟も學術を以て身を立てんとする者は是非共一本を座右に備ふるの必要あり。

東洋大學講師
大阪島之内高等女學校長 伊賀駒吉郎氏新著

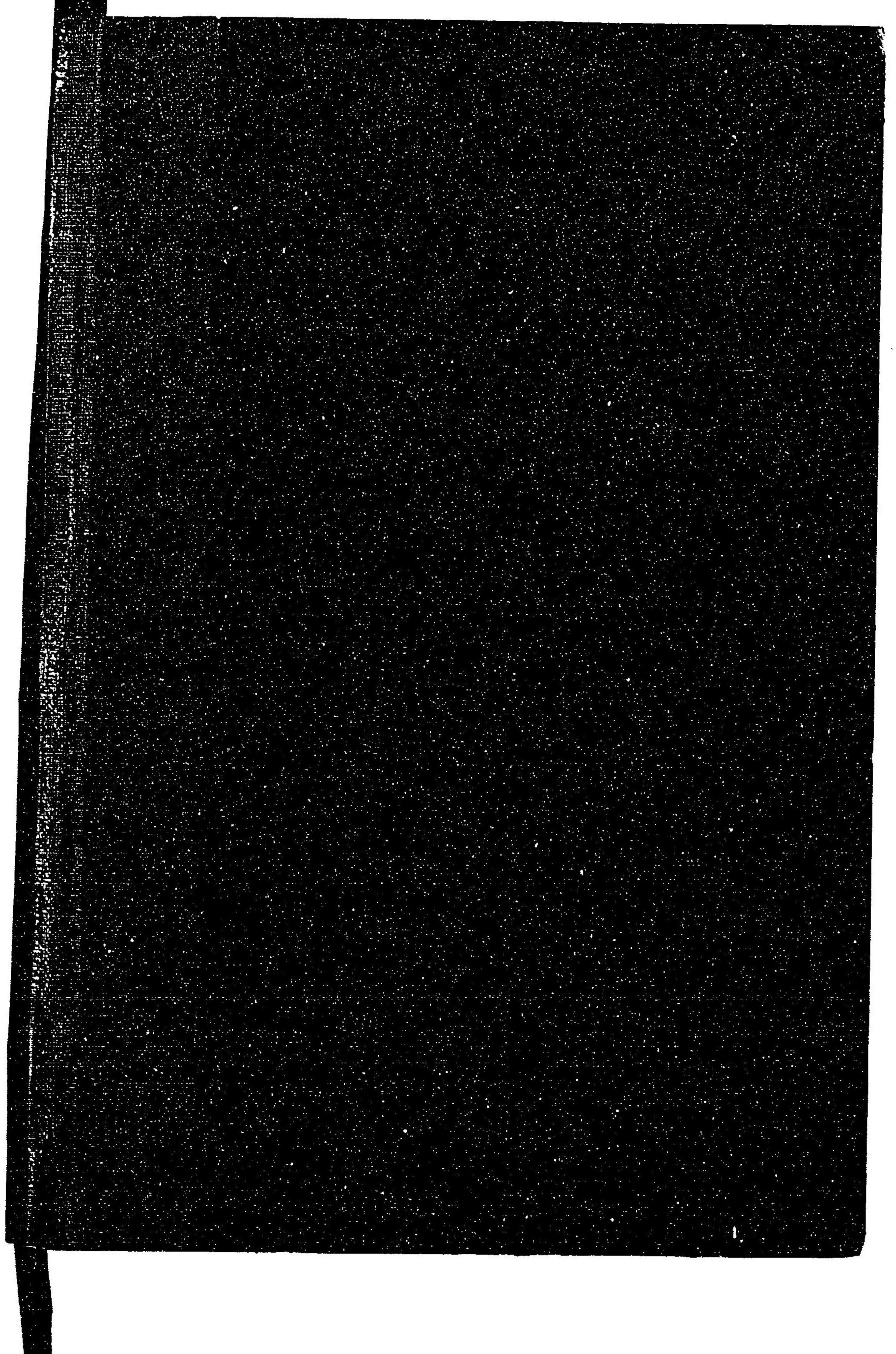
●女性大觀

洋裝最
紙數九百餘
特價貳圓
小包拾貳錢

本書は先づ儒佛耶三教女性觀に起筆して我國女性史に及ぶ。犀利明確。次で女性の身體と精神とを詳論して男女尊卑論に及ぶ。著者の立脚地漸く明なり。以下逐序、或は女子教育の目的を論じ或は高等女學校の性質を説く。曰く女子の高等教育論、女子職業論、結婚論、家庭論、凡そ女性に關する一切の問題は縦横無盡、眞に論じて餘蘊なし。苟も世の紳士、淑女たるもの本書を購讀して内、自家の本領を明かにして、處世の指針とせよ。

324

117



324

117

019569-000-3

324-117

清新禪話

忽滑谷快天 / 著

M42.2

ABG-0343

